古史傳

自第六十一段
至第六十六段

十四

和書門
類
四二五一九號
一三一函
一二架
二七冊

内閣文庫
和書
類
四二九號
一函
七七冊
架

内閣文庫

番號	和	94
冊數	27	(14)
函號	140	184

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

町田久成獻納之章

古史傳十四上卷

和九四 弭

平篤胤謹撰
男 鐵胤
孫 延胤
續攷

淺草文庫

神代中六上卷

故其天太玉命者。産巢日神上御子。天櫛明玉命上兄也。示名謂天櫛玉命。示名天神玉命。此

神出后神。謂天比理刀咩命。其子謂大宮能賣命。是。太玉命。久志備所生出神也。亦子謂天神立命。亦名天押健角身命。亦子謂天櫛耳命。又諸忌部。供作諸氏者。悉太玉命所率出氏氏也。故天太玉命者。忌部首。小山連。日置部。白堤首。葛野鴨縣主。久我直。葛城直。役直。矢田部。纒向神主。穴師神主等出祖也。

天太玉命。古事記ふた布刀玉命と作ア。記紀共ふ天てふ言あし。今た姓氏錄まと古語拾遺まとアて天字を冠ア於。名義太は玉を稱て冠とる辭あめ。

此神の名ふ玉てふ言を負坐る由た。上第五十三段ふ注る如く。其妹天櫛明玉命ふ代めて玉を立奉らむ。由ま因るあとあア。師た太手向の意あはべしと云ちて皇產靈神きおれと。然た有まじくおそ。

此御子ふ坐こをた。姓氏錄。古語拾遺ふ見えて。下ふ引ア。

天櫛明玉命は兄ふ坐おとた。御鎭坐本記ま。太玉命た。櫛明玉命兄也。と有まとめて。前ふ委く云ア紀。第五十一段合せ考べし。

○天櫛玉命。此名は姓氏錄ま見え。高御魂命子。天櫛玉命と有て。下ふ引るゞ如し。まと天神本紀まも見えて。鴨縣主の処ふ引とり。ちて此た。太玉命は亦名ある由た。まお櫛た奇の借字ふて。此も玉は稱辭ふ添ゞ。太と櫛と對ア稱美とる例た。太兆を太麻知とも云るの轉ア。太麻等とも云故ふ。其を掌る神ま。太麻等能智命とも。櫛眞智命をも申を以て知べし。此事委くた前段ふ云へりき。

殊ふ神名式ふ。大和國高市郡ふ。太玉命神社四座。並名神大。月次新嘗。此社た。清和天皇紀ま。貞觀元年正月。授大和國太玉命神從五位上と見も。此た今忌部村と云ま太玉命社記ま。今春日神と云をいへり。さて此四座を。太玉命。大宮賣命。豐石窓。櫛石窓命ふおゆといアども。此た拾遺まとりて云る。たしたゞ紀るべと。三座た已いまゞ思得ば。まと式ふ。此ア竝びて。櫛玉命神社四座。並名神大。月次新嘗。○清和天皇紀ま。貞觀元年正月ふ。太玉命神ま。從五位上を授奉

とゐふ度ゝ此社ゝも従五位上を授奉さまへ　とゐのゆ二
ゆ今眞弓村と云ゝ在て八幡宮と称ゑとぞ
社共ゝ四座ゝて御ゐのしらひも同死を思ふゝ此も二名
を二社ゝ齋とるゝて疑ゝく同神ゝる故ときさゐ也ゝゐ（鴨縣主の処ゝ云を見た）
○天神王命此名も神代系紀ゝ見えとゆ（但し太玉命と云名を高皇産霊尊兒の処ゝ記し此名をむ神皇産霊尊兒の処ゝ記しとき〻泥むべゝらば此も太玉命の亦名ゝる由も下ゝ云を見た）名義神も太と云ひ櫛と云ゝ等しく玉も
稱辭ゝて異ゝる義ゝし（天神魂命を作る処もあれど正字も玉ゝて魂とゐるハ借字ゝゆ也べて神名ゝ魂字を書るをむムスビを訓こと〻の
み心得るも非ゝる由第二段角凝魂命の処ゝ委く辨へ
とるゞ如し）○天比理刀咩命比理の義いまゞ思ひ得ゑ刀咩
も女神ゝ多く申せる稱ゝゐゐゝと上ゝ注るゞ如し（第十段志

那斗辺神の下合せ考ふべし）ちて此神の太玉命も后神ゝる由もまゝ
古語拾遺ゝ神武天皇も御世も事を記せる處ゝ天富命
（太玉命之孫）云く更求沃壤分阿波齋部率往東土云く阿波忌
部所居便名安房郡今安房国是也天富命即於其地立太玉命社
今謂之安房社故其神戸有齋部氏と見えて神名式ゝ安
房国安房郡ゝ安房坐神社（名神大月次新嘗）ゝまゝ竝ばて后神
天比理刀咩命神社（大）ゝゐのゆ安房坐神社の事も仁
明天皇紀ゝ承和三年七月安房国無位安房大神奉授從
五位下同九年十月奉授正五位下文徳天皇紀仁壽二年
八月特加從三位清和天皇紀貞觀元年正月安房国從三

位勲八等安房神正三位ぶを見も。今大井村と云ふ在て洲碕明神を申て一宮
ぶり大井村に和名抄ふ同郡ふ大井於保井とある地ぶ
るべし。さて當国長狭郡ふ日置加茂丈部を云郷ぶり由
ぶとあり。后神も安房大神ふ位階を奉ぢ給ふごをふ同位
階を授奉ぢ給ふゆ。今洲碕村と云ふ在て安房社と三里
も洲碕神と申せしとぞ扶桑見聞私記ふ治承四年八月
むゝり隔れる海辺ぶり元に此神を
の條ふ武衛令著安房国平群郡猟島云く其夜當国洲碕
明神御宝前ふて源に同ぶあがをぞ石清水せき上てとぞ
雲に上まで此明神は八幡大菩薩を祝ひ奉ると見も然
きむ洲碕明神と申せるハいと古き事ぶりゆ然ふて
も八幡大神と云るに其頃かくも誤れるふぶそ○まと
下野国寒川郡ふも安房神社式ふ見えとゆ當国
の式社考ふ粟野宮村ふ在て太王命と云と云ぢ。ちて年
中行事祕抄ふ引る。高橋氏文ふ。景行天皇上總国安房浮
嶋宮ふ至ませ体時ふ。高橋連祖磐鹿六鴈命。御供ふ仕奉

ぢて。堅魚と白蛤を料理仕奉れる處ふ。是時上總国安房
大神乎。御食都神止坐奉云く。神齋大嘗等供奉始支。但安房
大神為御食津神者今大膳職祭神也○元く集ふも本朝
月令ふ引て安房大神為御食神今大膳職祭神也とぶ
を見とぶ。此時の御嘗は。深き由あぢて。重く齋ひ給ふる
ぶれど。安房坐大神を。御食津神と坐奉ぢ給へ体ぶゆけ
ぢ。此事委くハ景行天皇卷五十三年の下ふ注べし。かくてはと同文ふ。六鴈命の
薨とゆし事を記して。其時の宣命ふ。六鴈命に魂を。大膳
職ふ齋ひ奉ぢ給ふ由見え。神名式ふ。大膳職坐神三座。御
食津神社。火雷神社。高倍神社と有て。高倍神とも。六鴈命
を申し。火雷神とは。清和天皇紀。貞觀元年正月に處ふ。大

膳職。齋火武主比命と有まで。火神ふ坐し。御食津神とて。安房太神ふ坐ゝ已。世の学者は御食津神と申せど豊宇気毘賣命とのみ思ふをかゝる例をもとく思ふべきものぞ。○其子とて。太玉命は子の由あり。御母は天比理刀咩命あゆしやいかゞ有らむ知らば○大宮能賣命は事は上ふ委く註ゆ。第五十七段見べし。○天神立命。天押立命。建角身命。名義神は稱辭。天押盾と云もの有れど其義は名ある法し。まと按ふ立は底立神は立と同く多知と訓て多は之ふ通ふ辞知は比古遅神は知ふ同じ押立と云ふ押は大の約まるあらむ。第八段天忍許呂別の下見るべし。此神名を天神本紀は忍立と作り。あゞ同ことあり。今は姓氏録ふをまで。建角身命と申は名義は下ふ注法ち。神武天皇巻みるべし。ちて此三名を一神の別名と定ゑて。太玉命亦名天櫛玉命亦名天神玉命。は子と定とる由は。鴨縣主は下ゑ已。次ふ注を見て辨ふ法し。○天櫛耳命。名義櫛は奇ふて美稱ある已。耳は義は忍穂耳命の下ふ云へゆ。さる此命は。姓氏録。日置部の條ふ。天櫛玉命男と有て。下ふ引るゞ如し。櫛玉命やゐて太玉命ある。上よも下よも考へ注せる如くあまで。即太玉命は子と舉とはある已。○忌部諸氏。忌部は伊美辨と訓法し。伊无辨と云は正らば。伊美は伊波比の約れる言ふて。神を齋ひ祭る故ふ云ひ。波比は比と約まる。比と美ぞは。親しく通ふ音ある故ふ。伊美といふ。部は年禮の約まる已米ある。辨と牙るふて忌も部も正字ある已。下ふ云を見て知べし。諸氏ぞは。上件

件ふ出とる阿波国。伊勢国。讃岐国。木国。出雲国王作おど
れ諸忌部氏をいゑゆ。○悉太王命所率之氏氏也。右の諸
忌部氏を悉ふ太王命の率とゐし氏々おほ由と。古語拾
遺ふ。高皇産靈神男名曰天太王命。斎部宿祢祖也。太王命所率神
名曰天日鷲命。阿波国忌部祖也。手置帆負命。讃岐国忌部祖也。彦狭知命。
紀伊国忌部祖也。櫛明玉命。出雲国忌部王作祖也。○今本王作の上れ忌部を脱せり。今た元々集ふ引
るよ依ゐ。天目一箇命。筑紫伊勢両国忌部祖也。まと令太王命率諸部神造
和幣と見え。まと皇美麻命天降段の天津神れ大詔命ふ。
宜太王命率諸部神供奉其職。如天上儀と詔へるとあも
て知ぢし。此等を考へ合せて。忌部諸氏をり氏々也までの文た記せるおゆ。かゝれ窮太

王命れ。諸忌部を率とゐした。天神の大詔命ふぞ有れば。
故神武天皇の御世れ事を記せる處よも。令天富命太王命之
孫。率手置帆負彦狭知二神之孫。以斎斧斎鉏始採山材搆
立正殿云々。採材斎部所居謂之御木造殿斎部所居謂之
麁香。まと令天富命率斎部諸氏作種々神寶。鏡玉矛盾木
綿麻等。まゐ天富命率諸斎部捧持天璽鏡劔奉安正殿。ま
ゐ令天富命率供作諸氏造作大幣おど見えば。と崇神天
皇の御世れ事を記せる處ふ。令斎部氏率石凝姥神斎天
目一箇神斎二氏更鑄鏡造劔以為護身御璽とも見えて。
太王命れ裔の次々。其職を掌とゐし外ゐ。師説の如くも

也忌部とは。神を祭る種々れ物を造ゆ。まさ然らでも凡て齋潔清れ卍て。事戎爲妄職を云名ふて。（この れ採材齋部造殿齋部の類）

あ卍。齋部諸氏とあるも。諸氏の齋部ふ卍。まと同書ふ。宮内部氏任其職也いひ。其次よも。齋部氏と立藏号齋藏今齋云るれ。太王命の末。忌部首をさけれり。けて一通卍見て

は。太王命れ率さるれ。上件見えさ依。忌部諸氏れみのお也所思をど。忌部と稱ざ依。猿女鏡作服部倭文麻績れ諸

氏をも。率さ卍れむ也所思も。其れ上ふ引る文どもふ。率諸部神と云ひ。率供作諸氏造作大幣といひ。殊ふ率石凝

姥神齋也も有るを。熟思ふ。ば。鏡作服部倭文麻績の諸

氏の作る物等は。悉く大幣物ふる上れ。太王命れ。それ諸

氏をも率さ卍れむさと。更ふ疑れきもの戎や。故同書れ

末ふ。凡造大幣者。亦須依神代之職。齋部之官率供作諸氏。

准例造備。然則神祇官神部可有中臣。齋部。猿女。鏡作。王作。

盾作。神服。倭文。麻績等。氏。而今唯有中臣齋部等二三氏。自

餘諸氏不預考選。神齋亡散其葉將絶といふ卍。（此文ふ。齋部之官と

云るれ。中臣と並ば。て。神祇官ふ置ば。齋部の官人をいひて。其去ふれ。ち太王命の齋ふ。）けて此愁

訴。まさと理ふる語ふて。天神れ大詔命ふ。宜諸部神供

奉其職如天上儀と詔ふる。神代の源を思ふ。かくやお

也ふ卍諸氏れ。いろよも其齋れ絶まじく。殖榮也ば。く定

置き給ふば。き事と所思也ふ。何ふる事ふ。有々む。遠

外国くよりみ住し免給ひて。神祇官の神部ゐた。あゞ中臣齋部の両氏字のみ置れした。甚も心得ゞ為ぬ事ゐめけ卍。職員令ゐ。神祇官の神部三十人と有て。義解ゐ。中臣、忌部取用。當司及諸司中者と見え。集解の問ゐ。此義解の文を挙て。然則不必神部と云る答ゐ。雖他司人猶取用因茲言之。取用神部於事无妨ぞいへり。是ゐたくりて考るゐ。神祇官ゐ。神部三十人。と立置るまども。其人數を具ゐ。彼中臣奏天神寿詞。忌部奏神璽鏡劔ゐど。其外ゐも。中臣忌部を用ふる事の有る時ゐ。當司外る両氏を大副ゐまれ。少副ゐまを。其餘外官ゐまを。取用ひて。足ざるた。他司くりも取用ひて。事を辨へとるゐれ卍。かくて神部の中ゐ。餘の氏くとてた。一氏も無ゐ卍。果して廣成宿禰外歎られし如く。国くゐる神裔の諸氏も。漸くゐ亡散てや有れむ。後ゐた聞えぐ外卍て。宮主口傳抄ゐ。後醍醐天皇文保二年十月大嘗會の事を記せる処ゐ。大殿祭少副齋部平典權少副大中臣冬親勤之と見えまと嘉暦三年九月伊勢公卿勅使発遣行幸日齋部憲親不下立自堂上投内宮御幣之間兼豊以行事左中辨光顕朝臣経奏聞令責下畢為後鑒書加之と云ことゐり。其時左中將俊氏朝臣くり。官幣使齋部官人等事。国史記録文分明之上者向後下立壇上可授幣帛之由嚴密被召仰畢此上者不可有子細之旨被仰下候也仍狂達如件とゐ卍。まと同天皇の建武元年九月十一日例幣行幸之日權大副齋部親重宿禰不下立於堂上令授内宮御幣之間関白殿下後田光院殿御祗候有御狂奏尋問祭主蔭直卿被責下訖後代之亀鏡也と見も。太王命れ末の齋部氏さ子ゐ。今は齋部代として。他氏を用ひ給ふ事とゐれるた。歎息とも慷慨とも悲哀とも。言む去べゐく。身も慄たまて。忌〻ちく可畏く所思ゆれど。況て其氏人の首と有し。廣成宿禰の愁訴れ條〻。ちまはと信ゐ然る事ゐも。宜ゐゆとも言む方ぞ無卍れ。是みゐ由ゐき異国の道れ行れとるくり。廣成宿禰の言

れさる浮華競ひ奥ゐて事代を逐て変改せし矣故実を顧問ひ根源を識る人稀ふあれると乱世の逆事をりかくれ成もて來し矣阿く波く礼く今かく治れる御世のおるしよ廣成宿祢の愁訴れ高く達えて古道ふ復し給むむ由もゞあ廣成宿祢れ拾遺を奏進られし時に其齢八十を逾されしと有を已ゞかく切ふ思ふ心よに斯むゥ ゐ大愁矣畜さゐし人れ矣くも然むゥり命長ゥりゆとさ矛ぞ思に然ハ思はざるふやさてまさ上件の諸氏既く絶さゐと所思るハ前をのみ見て後を見ざる人の心あゐ矣く其道を以て紹し給に むゥに一氏も実ふ絶さるは有まじく所思も其に日神産霊神れ御言のまゝ無窮ふ日神の御子れ命の知看しまし坐もの矣や○忌部首古事記ふ布刀玉命者忌部首等之祖と見え神代紀ふ忌部遠祖太玉命と云ゐ古へは首れ加婆禰ふゐしを天武天皇紀ふ九年正月甲申天皇御于向小殿宴王卿於大殿之庭是日忌部首子首賜姓曰連則與弟色

弗共悦拝師云今本ふ子首の子字脱さり上文ふ子人と啓し首の意に古の韻ふ云ゐる故ふ自ゥら省ゥゐさるふり同天皇紀ふ大三輪眞上田子人と云人をも文武天皇紀ふ兒首と書れさり此も同じ矣見えて此矣連矣ふれるをは矣十二年十二月此下ふ忌部連賜姓曰宿禰と有て大氏に此矣ゐ宿禰とふきるを小氏ふ稍後まで首ふるも有し矣孝謙天皇紀ふ天平寶字二年十二月壬寅外從五位下忌部首黒麻呂等若干人賜姓連忌部首融麻呂等若干人賜姓造と有て此等ハ同姓ふゞら いまゞ連ふも宿禰ふもれらで有し族ふゐ此大氏は姓氏録右京天神ふ齋部宿禰高皇産霊命子天太玉命之後也と云きて右京

ふ住るを。小氏の家くに。畿内ふに住ざゐしと見えて。姓氏録よ。右は一家はみ載られとめ。忌を齋を作ふに。桓武天皇紀延暦二十二年三月の處ふ。右京人忌部宿禰濱成等。改忌部爲齋部と見え。濱成に。彼釈紀よ引る。天書てふ物を撰れる人あり。右京人とゐれば。姓氏録よ載されとる家れること。清和天皇紀ふ。貞觀十一年十月廿九日。神祇大祐正六位上忌部宿禰高善。改忌部爲齋部。其先出自高御魂命也とゐゐ。清和天皇紀の文。今本よ。改忌部の三字を脫せり。古本ふあり。さて此に多く字を改免とるふり。凡て古へに姓名ふども。文字は心よ隨せて。いろよも書るを。此ころはちて首は上第三十九段。ふ委く注。既ふ。其も定まるゐゐ。せる如く。大人は意ふて。姓の下ふ附るに加婆泥よて。其部の長を云。太王命の御末は忌部氏に。上ふ舉とる諸忌部を率て。其長とに仕奉ふ故よ。忌部首と云。尸を負る外ゐ。師云。自の職を以て名くるふに非ず。かの中臣氏ふどは。卽其職を以て名るとに異ふり。然れど首は加波泥に。此氏ふいと相應しき尸ふゐけゐ。然る後天武天皇の御世よ。連の尸を賜へゐしうば。兄弟共悅拜とゐるに。上古とめ。連に首とめ。稍貴き加婆泥と定めゐむ故ふ。其を賜へるを悅ばるふらむ。連は群主の義よて。其部は主とる義ふれど。此加婆泥も。此氏よ相應しき尸ふゐ。かくて後ふ。宿禰の尸を賜へふふとは。同天皇は十二年十月は詔曰よ。更改諸氏之族姓。作八色之姓。混天下萬姓。一曰眞人。二曰朝臣。三曰宿禰。

四日忌寸。五日道師。六日臣。七日連。八日稲置と有て。宿禰
て第三ふ立られさ㐌姓ふるゞ。此時定られ㐌ふ八色の
姓れ中ふ。連て七日と㐌きぞ。六日臣。五日道師。四日忌寸
を越て。三日と㐌る宿禰を賜へ㐌ふきて。厚れ御恵と云
ばし。但し宿禰きて。少兄てふ言ふて。大兄ふ對ひさる敬
称ふきど。忌部を総司る職業ふとりてて。首と云ひ。
連といふ尸れふさて。ちて此氏人れ神事ふ仕奉れ㐌事
あれふて若ざ㐌ふ尸。れて此氏人れ神事ふ仕奉れ㐌事
れ始て。上れ段くふ載せる。太玉命の。兒屋命と相並ぞし
て事執尸給ふる。事蹟を見て知べし。互ふ勝劣ふしとも
見もれど。熟察れぞ。兒屋命は左ふ就き。太玉命は右ふ就
き給ふゞれ差別の。自然ふ見もるは。信ふ然ぞ坐しけ

む。其て紀記の二典ともふ。二神の名を舉㐌ふ多くて兒
屋命を先ふ。太玉命を後ふ爲さるて。神代を尸ぶ。ふ傳と
る故ふらむと所思るふ。況て書紀ふ。皇美麻命御天降の
段れ。大物主神を祭給ふ事を記せる處ふ。使太玉命弱肩
被太手襁而代御手以祭此神者始起於此矣且天兒屋命
主神事之宗源者也故俾以太占之卜事而奉仕焉と有ゆ。
神事れ宗源さる。太占れ卜事ぞ以て仕奉ると。太手襁を
被て。御手代と爲て仕奉ると。其左右勝劣れ異の灼
く聞え㐌尸。舊く中臣て連。忌部て首
ふりしも此由ふるべし。神祇令ふ。凡踐祚之
日。中臣奏天神之壽詞。忌部上神璽之鏡劔。と有て。貞観儀式延喜

式の践祚大嘗祭の処よりもかくあり。此れ神代を已の御儀れまふ〳〵定られとる事と所思也。其由れ下第百三十四段の事実まと神武天皇巻よ天皇高御座よ即坐ル処よ太玉命の孫天富命天ッ璽の鏡劔を擎げ兒屋命の孫天種子命天ッ神れ寿詞を奏せりとある下ふ云べし。綏靖天皇ゟり次く高御座ふ即給ふ時もかく有々むを其事れ見えざるれ定れる式ふきだ記されざるあり。れふ此事れ神武天皇巻ふ注ふを合せ見て知べし。しかて中臣氏人れ重祀神事を掌れる狀前段ふ委く辨へある如く推古天皇の御世ふ小德冠前事奏官中臣御食子大連ふ祭官を兼ね給ひ。此れ鎌足公の父ふり。舒明天皇れ御世よ御食子れ弟囮子大連意美麻呂れ父れ已ふ。其職を繼し給へるふぞを思ふふ。以上れ中臣系図よゟりて云祭官と云れ後ふ定られと依神祇伯と同趣ふ聞也

きだ忌部氏れ掌る狀れ後ふ立られとる大副と云官れ趣ふぞ似と已れむ斯て古語拾遺ふ至小治田朝推古天皇の御世を申せり太玉命之胤不絶如帶天恩興廢繼絶纔供其職至于難波長柄豐前朝白雉四年印本雉を鳳ふ誤れり今れ一本まと一本並ふ師説まと松下見林ふどの説よ従て改ル也白鳳れ舊き事識人の考とる如く大友天皇の年号ふきだふり然れども白鳳ふ誤まるもいと古きことれり其れ本朝月令年中行事祕抄公事根元ふぞふ此文を引て同く白鳳とあきだふ。以小華下諱齋部首作賀斯拜神官頭印本ふ〳〵ふ今神祇伯也と云五字ふ已今れ官本よ無よ従て刪り也但し其れ後人の加筆あれども説れ信ふ然ことあるを日下部勝皐れ疑斎と云物よ此を甚く咎とる。令掌敘王族宮内禮儀婚姻卜筮れ深く思れざるれり。

事夏冬二季御卜之式始起此時と有れだ忌部氏を神官

頭ふ拜され給ふる例も有しれど。然まども此れ適れ事ふ
依ふ就て按ふふ。皇極天皇紀三年正月れ處ふ以中臣鎌
子連拜神祇伯再三固辭不就と見え給ふは。思ふ旨ありて
て。辭まれとて所思ゆるふ。その思れし旨れ此翌年
を思ふふ。其謀の事議ふど有て。神別ふ餘人を拜給ふ依
事ふ仕奉ゞ給ふく思れしふや。
事も見えざれど。孝德天皇れ御世ふふて。作賀斯首を
拜給まへ依ふらむかし。然るを疑齋ふ。拾遺の此傳を疑
皇紀ふ九年三月中臣金連宣祝詞十年正月中臣金連命て。鎌子連れ辭とされど。天智天
宣神事とも有れど。鎌子連の辭とる後ふ。金連を伯ふ拜
れとるふらむ。然まバ中臣一家聯縣相承て。いゝ〻他氏
を廚ふこと在む。と云へれども。此れ強ふ。廣成宿祢を言
貶さむを為とる。誣言ふふむ有れる。其れ中臣氏人の祝
詞を宣り。神事仕奉ることれ。伯ふらびとも。元をりれ職

ふるなや。けて此御世ふ。王族宮内禮儀婚姻卜筮事を掌敘と
ゆとゆるも事實ふ符ひて。信ふ然有れむとたゞや。其れ
此御世れ。天智天皇。皇太子と坐まして。政奏し給ひ。多く
古風を廢て。漢風ふ改め給ひ。大化五年と云年の正月。詔
博士高向漢人玄理與釋僧旻置八省百官を見え。白雉五
年れ頃も。ふゝいまゞ其式の整ざゆれむ狀ふて。種くれ
書等を。唐國ふ求め給へるを思ふふ。其いまゞ整ざる間
れ。神官ふて行ひ。作賀斯首も其を掌とゆれむかし。其れ置八
省百官とのミ云て。官廳を建とりとれ。記されざるをも
思ふべし。事れ始まりれ。凡て斯有るものふるをや。然る
を疑齋ふ。夫王族中務之所掌也。宮内禮儀式部及宮内之
所掌也。婚姻治部之所掌也。彼在一官殆犯四省。詎可不疑

乎と云るに善く整へる後の状を以て其始を論へるゐて思慮の委々らざゐあり八省百官の事あど孝德天皇れ御世ゐ始を起ちまと卍とに聞もれども善く整ちて牙るに文武天皇の御世ゐりや所思るめのなや、

卜筮の事を紋ゐ卍といひ夏冬二季御卜之式始起此時

や云るゐとに書紀ゐ見えざきども信ゐ然るぢし其に

卜筮やはい牙れども宗は龜卜れ事ゐ卍其に二季の御卜れ筮まれあらで亀卜ゐるを以て知ぢし此に上代をゆ鹿卜の太兆ゐ卍し歟漢風れ龜卜ゐ替て其式をも定られしを云るゐらむ宮主口傳抄ゐ

後醍醐天皇元應元年六月の御卜れ処ゐ御躰御卜者孝德天皇被始行之至當御代五十九代相続尋其濫觴者天皇春宮君御躰安穏之義也宮主携亀卜令奉仕と見えり さて亀卜ゐ替ても称れ古のまゝゐ太兆や云りと聞も此も同書ゐ御卜仕奉り竟て後ゐ奏書書様を載るゐ天皇我御躰御卜尓卜部等太兆尓卜供奉須留状奏久

云くとあり其に龜卜に既く神功皇后の御世ゐ雷大臣命れ韓へわゐ卍て傳へ歸られしゐど此時までハ用ひらきざ卍しを此御世ゐ其を用ひ給へるゐぢし さるは令は天智天皇れ御心を卍事起ゆて文武天皇れ御世ゐ成きるゐるゐ神祇官の御卜れ鹿卜ゐらで龜卜ゐる歟以て然に知らるゝ外卍鹿卜の太兆を亀卜ゐ替られとる御世れとハ知られざる事ゐぢを此考大々と違ひ有りじとぞおもゐる ちて右の連次れ文ゐ作賀斯之亂不能繼其職陵遲衰微以至今至于淨御原朝天武天皇の御世を申せり

改天下萬姓而分爲八等唯序當年之勞不本天降之績其二曰朝臣以賜中臣氏命以太刀其三曰宿禰以賜忌部氏

命以小刀とゐる。此も當時の衰微を歎さるれみも。然こ
をふ聞めれぞも。作賀斯れ亂として。其職を繼こを能ざ
るあとはあと中臣を卑も一等卑く。御ゐしらひ有おを〳〵
残歎とるは。少しいかゞ。あ卑。其も中臣をり必卑ゐるば
きあとまと神官頭ふ外きる事も。常の例とは爲かと知
事も。既ふ上ふ注せ法如く犯きばあ卑。此も疑齋の論法
をく當れ卑。
と殿祭門祭者。元太王命。供奉之儀。齋部氏之所職也。殿祭とも。
大殿祭をいひ。門祭とも御門祭を云卑。此二祭は。その始
免太王命の。專を掌れる祭あれむ。元をり忌部氏も職ふ
ること。第五十七段ふ注せるゲおとし。雖然中臣齋部共任神祇官相副供奉。
故宮内省奏詞稱將供奉御殿祭而。中臣齋部候御門。至寶

龜年中。初宮内少輔從五位下中臣朝臣常。恣改奏詞曰。中
臣率齋部候御門者。彼省因循。永爲後例。于今未改。と云る
も。實ふ理ある歎ふれども。肇自神代中臣齋部供奉神事。
無有差降。中間以來權移一氏。齋宮寮主神司中臣齋部者。
元同七位官。而延曆初。朝原内親王奉齋之日。殊降齋部爲
八位官。于今不復。といふる歎きも。いろふぞや聞も。其も疑齋
ふ。中臣齋部。如其優劣。中臣爲副則齋部爲祐。中臣爲伯則
齋部爲副。而位階稱之。雖時或先後。亦終究其所極。爲神亀
五年七月二十一日。勅定齋宮及屬官位階也。乃以中臣爲
從七位官。忌部宮主竝爲從八位。詳見官位令集解。此云元
七位官。而延曆初。殊降齋部爲八位官。其說示盾と云へる
ゲ如し。然れども疑齋ふ。廣成將以欺誣有司。紊乱政途。熒
侮之言施及後昆。何其鄙也。あど云るも。あまりふ酷しと
云べし。齋部ふ。何の恨むるこを有て。斯まで憎ミ訕れる

ふや。又云。勝寶九歳。左辨官、口宣。自今以後。伊勢太神宮、幣帛使。専用中臣。勿差他姓者。其事雖不行。猶所載官例。未刋除。と云るた。孝謙天皇、紀ふ。天平寶字元年六月乙未。始制伊勢大神宮、幣帛使。自今以後差中臣。不得用他姓人。と見る制をいふ。勝寶九歳とた。天平勝寶九年をいふ。此年去れたち天平寶字元年ふめ。然れども唯ふかく宣ひ出とはのみふて。其事不行した。神の御心はそ有々む。其ちおの

翌年。天平宝字二年八月ね処ふ。乙卯遣左大舎人頭河内王。従八位下中臣朝臣池守。大初位上忌部宿祢人成等。奉幣帛。於伊勢大神宮。六年十一月丁丑。遣文屋眞人淨三。藤原朝臣黒麻呂。神祇大副従五位下中臣朝臣毛人。少副従五位下忌部宿祢呰麻呂等四人。奉幣。於伊勢大神宮。桓武天皇紀ふ。延暦十年八月辛卯。夜有盗。燒伊勢大神宮正殿。

云く。遣参議神祇伯従四位下大中臣朝臣諸魚。神祇大副外従五位下忌部宿祢人上。於伊勢大神宮。奉幣帛。以謝神宮。被焚。ふど見えて。他姓人をも奉幣ふ遣し給へるを以て。天平宝字元年の制れ行たれざる事を知ばし。ちて中臣と忌部とた。右ふ辨ふとは如く。上古をいさく。の比優劣は有しらど。共ゐ竝びて其職ふ仕奉りしを。中臣氏のおを外く盛ふあれる由た。皇極天皇御世ふ。蘇我蝦夷。それ子入鹿ともふ。御政事奏して。種々ゐし処所爲れ有れるふ。此時天智天皇は。中大兄皇子と申ちく。ふどふて。中臣鎌子連と謀を給ひて。入鹿父子を誅し給へを。しらば。其功ふ依て重く用られ。中臣氏れ勢。次々ふ大ふあをを。此等のこと。書紀を見て知べし。かくて鎌足公た。藤原朝臣の

姓を賜ハ㆑。大織冠はでゐ登㆑。其子不比等公をゆ次く。其姓を承とめしうば。神事ゐた。同族ある中臣意美麻呂仕奉㆑て。此をゆ藤原。中臣職を異ゐたけはゐと。前段ゐ委く注せるゲ如し。斯在しうば。中臣れ氏人の勢た。次く大ゐ㆑。忌部氏た漸くゐ劣㆑來し故ゐ。中世ゐ。中臣家を㆑。忌部氏を貶し免とる事も有きと聞えと㆑。其た上ゐ記せる。宮内省の奏詞を改とはゐどを思ふべし。終ゐ兩家れ爭論ゐも起ゆりはゐ。其た平城天皇紀ゐ。大同元年八月庚午。先是中臣忌部兩氏各有相訴。中臣云。忌部者本造幣帛不申祝詞。然則不可以忌部氏爲幣帛使。神代ゐ。太玉命祝詞た申さぐれども。上古事記ゐ。布刀玉命。布登御幣登取持

而と見え。書紀ゐも然見えとれど。祝詞た申さぐとも。幣帛た奉るべき職ゐり。然れど中臣と共ゐ。幣帛使とらむとと。故実ゐ符へ㆑。然るを本造幣帛ゐり。はと忌部氏云奉幣のみ云ゑるた。中臣の強言ゐり。祈禱是忌部職也。然則以忌部氏爲幣帛使。以中臣氏可預祓使。彼此相論各有所據。祈禱た。中臣の專とゐる職ゐるを。祓使ゐのミ預るべしと。二典ゐ見えとはゲ如くれと云るた。忌部れ强言ゐ㆑。是日勅命據日本書紀。天照大神閉天磐戸之時。中臣連遠祖天兒屋命。忌部遠祖太玉命。掘天香山之五百箇眞坂樹而。上枝懸八坂瓊之五百箇御統。中枝懸八咫鏡。下枝懸靑和幣白和幣。相與致祈禱者。然則至祈禱事。中臣忌部竝可相預。中臣連と云とり祈禱まで。書紀本書の文ゐり。最も畏く理ある勅命ゐぞ有けはゐ。又神祇令云。其祈年月次祭者。中臣宣祝

祠忌部班幣帛踐祚之日中臣奏天神壽詞忌部上神璽鏡劔おむ上ふ引て既ふ注りき。六月十二月晦日大祓者。中臣上御祓麻宣祝詞常祀之外。須向諸社供幣帛者。皆取五位以上卜食者充之宜常祀之外奉幣之使。取用兩氏必當相半。自餘之事專依令條と見えと。此れ時代をはゝるふ。忌部れ廣成宿禰ふるぼく所思も。其は此爭論ふ。勅裁ふとめて靜成。次給へふれ。大同元年八月ふきども。先是云〳〵と有きだ。爭論の起きるは。大ゝと桓武天皇れ御世ふとめと卍の事ふめゝむを。勅裁ふ事ふみて後ふ。其家れ傳を求訪ふ乃卍ふ故ふ。其ふ就てれ。舊き憤を晴ゝむと爲て。述られとる事も有べくおぼゆ。其れ彼書の始ふ。愚臣不言恐絶無傳幸蒙召問欲攄畜憤故錄舊說敢以上聞といひ。まと後書ふ。愚臣廣成朽邁之齡既逾八十。犬馬之戀且暮彌切。忽然遷化含恨地下。街巷之談猶有可取。庸夫之思不易徒棄。幸遇求訪之體運。深歡口實之不墜。庶斯文之高達被天鑒之曲照焉。大同二年二月十三日と有を以て。天皇れ召問ふ乃へる故ふ撰記されふと因ふ。我ゞ家の衰微を歎き。自の憤をも述らまと。ふ事と知らまふ卍。さて大同二年を。一本ふ三年とふ。二年とふるれ更ふも云れば。三年としても。二月ふてれ。始ふ從五位下とふる位署ろあれば。其れ國史ふ。平城天皇大同三年十二月甲午授正六位齋部宿禰廣成從五位下云〳〵と見え。まと類聚國史職官部ふとり

て考るふこの宿祢は大同三年十二月大嘗祭の事にみゑ後ふ其賞として從五位下ふ敘せられとをバ拾遺を奏進られし當時は正六位上ありしろむあり然れど從五位下とゐるハ後人のわざれること疑れし志ろ、るを疑斎ふ此をも廣成ハ所為と志て書曰從五位下蓋栄其叙爵而追改也云く廣成以後之所授而改前之所署何其放耶と云るは いとゐぢきれしや○天文本ふは斎部廣成撰ぎのみありて位署あし

ちて其ふ就ては自ふ忌部を上過て實ふ違へる事ハ有らむも亦やおと外き勢ある事をも思ふばし其は神代紀の一書どもは諸家ハ記錄を採撫はきとる物外るふ其一書等を見れバ各く其家の遠祖の事ハ專とゐりて故実ふ違へりと見ゆる事も多ゐ侯を思ひ合せて悟るばし

然るを疑齋ふ吾嘗讀古語拾遺喟然廢卷而嘆曰古人有言曰水行者表深表不明則陷此書無表也恐童蒙之儔倀倀乎陷於詐偽焉

ふの論ふ廣成病祢を律にふ詐偽とまで言るは

いとも酷しき事あり

迺竊論曰廣成之奏此書不過乎愁訴齋部氏之衰廢也已

拾遺の書斎部氏の衰廢を愁訴せむとのみふ非ず此ハどは甚く故実ふ違へる事ハ多くふきるおとを歎き絶廢れとる故実を継興さむおとを希ふを主ぎして自の家ハ衰微とる事も故実の廢をとる一ッふ故ふ因ふ

蓋言昔在中臣齋部兩家曩祖竝執言出られとるあり

祭祀無復雌雄中世已來惟中臣氏專奉其職或行險以徼幸擢至台位瓜瓞之蕃繇殷隆齋部則不然逐世頹壞子孫孱庶僅僅不絶喪狗之憂纍纍無已方今國家降詔群臣制造洪範將以傳於不朽冀主上因已所奏眇復皇祖創業垂統之往躅顧念臣下守官供職之前勲而繼絶興廢更與中臣相竝而掌其職是臣之所望也

以上の論本書の主意をとく得とる論りて

信ふ廣成主の心はかくぞ有れる。豈其然乎。太古之世天兒屋命。太王命。掌祭祀而。兒屋命爲之司長云く。あの云くと約処とる処ふ。神代ふ兒屋根命は太王命とり上ふ坐ること。まと中臣氏は次くふ栄さる謂を論ひとは。其は上ふ既ふ注せる如くある故了省き於さて兒屋命を太王命の司長とりしとは云ゞさしとく古書を読て知べし。まと所望也と云るまでハ廣成の心をとく得とる論ふて。憎むべき事あらぬを。豈其然乎と云て惡へるは。何ある事ふう。故及寶龜中供大殿祭。改奏辭曰。率齋部。雖非舊式。是其勢也。廣成不自揣欲相抗。何其誣也。朝家尓其奏而弗用。不亦宜乎云く。尓れて用ひ給はざはしこと。何ふ見えとるやらむ覚束ふし。廣成の奏を。おゝふさし置給へるを見ての推量れるべし。自稱陵遲衰微。乃巧說衰辭。動躋皇祖以爲愁訴張本。師の辨ふ宝亀云くは事。是其勢あること。元をゆ然ゆ。然をども舊式ふ違ひとれば。廣成の愁訴いと理ふは。と云れし如くふるをいうで誣とし云むや。遂曰。起自天降洎乎東征。扈從群神名顯。国史或承皇天之嚴命。爲寶基之鎮衛。或遇昌運之洪啓助。神器之大造。然則至於錄功酬庸。須同預祀典。或未入班幣之例。猶懷介推之恨。遂曰とは。古語拾遺ふ。廣成の言を指て。廣成の語あゆ。然れは此ふ。安れハ。ち起自とり以下恨まで。太王命神社は。いまは班幣は列ふ入は給ハざはしと見ゆ。其裔とる人あれは。実ふ理ふる訴陳と云べし。然るを下文ふ。雖訴陳乃祖黙譎便佞耶。云く。此ふ言ふりうし。之預奠而陰希已躬之擢用。胡可不謂黙譎便佞耶。云く。此ふ云く。と約とる文は。皇子等の御末。まと道臣命。武内宿祢の胤ふどは。中古ふは。国政を犹は。しうど。其後は衰へ為るれぞの例を挙て。況て其餘は家の衰微を。歎くばらぬ事を論へは。師の辨ふ。己躬を栄やさむことを希ふは。人の眞情ふり。先祖父母への孝ふり。然るふ身の栄えを希はざるハ。名をむさぼる漢人は。ことざふり。と云れし

は然るあと外り。況て太王命て。天皇祖命の。兒屋命と並べて。殊更に皇美麻命の御守護を。託し給ふる計の功神あるものを。此時まで。班幣れ例ふを入給ハ。ざらむに。其裔として。歎ぐべて有べきぐは。齋部顛蹶亦有命哉。漢風の天命さど免とそ。甚うとてくれ。夫皇帝始卽位也。大嘗於神祇王公百僚。羅列匝拜中臣奏天神之壽詞。齋部奉神璽之鏡劒。国家之大禮也。累葉聯綿以至當時。當時とて。平城天皇の御世。廣成宿祢の時をさせり。さて此大礼の事て。今まと式に載ちきとるを。既に上に引て注せりき。而天長中有司奏曰。朝家寶器。莫重焉。然輒令齋部奉之。事涉於褻黷也。伏請從停廢。此事て淳和天皇紀天長■年■月の処に見とり。而はれ此時の奏請て。何ちふ官人の思ひ設ゐて。論ひ出とる言ありゐむ。其て宝器とて。神璽れ鏡劒の事あるゐ。此二種の。此とれく重き宝器ある故に。天御祖神の御定れまに〳〵。いと上古とり。太王命れ御末れ忌部氏れ。掌り來れる職あれ。然るを其氏人に

奏さしむる事て。褻黷に渉ると云こと。何を以て言出られとる論あらむ。此て思ふ。忌部の職。人れ位階を。八位の官と定られとる故に。然る界き位階れ入に奏さし免むこそて。可畏き事あり。然も有らば。忌部の定あるゐ。とて位階を。高く進免給ふべき由をこそ奏さるばきに。忌部の掌ることを。停廢むこそを奏されとるむいろある非心得ぞも。位階て漢れ效ひて。後に定らきと事れ免を。然る人世の定免に泥みて。天御祖神の大御定を。停廢ると云こと。れ有べきぐい。ちれるや漢人去らも。心あれて。其礼を愛ゐと云るものを。況て此て。御祖神の御定まして。人世とありても。神武天皇の御世とり。聯綿に絶るおとれく。當時まで。革免給ふことあく。既く。今まも式に記さきとる。無上重き大御礼あるものをや。長元。卽位其裔爲賀。復舊典纔供奉之蓋爲一時之榮。自茲已來無復聞矣。長元て。後一條天皇れ年号に。其十年と云年の七月に。後朱雀天皇卽位ませり。此年の四月に。長暦と改れ。爲賀。忌部の職に供奉れること。何に見とるゐ。予いまど考へ。此とり二百八十三年後。文保二年十月。御卽位の時れ事を。宮主口傳抄に記して。神祇

少副齋部平典と云人の勤とする由見えまと嘉暦三年九月伊勢公卿勅使を立らるゝ処ふ齋部憲親と云人見え建武元年九月ふも同じ勅使を立らるゝ処ふ齋部親重と云人の幣を授とる由も見ゆ然れど其廢とるゝ此と已後れ事ふること炳しさて彼家の我意ふ依て屏けられ絶とるゝ齋部至此終失其職録録備員而已暨於輓近子孫蔑爾祀典攸秩儻逢當用其人則假代以他姓號曰齋部代既爲恒範其傾替繫天也亦末如之何已矣と云るゝ事情をく思ひる論ふゆかし此を師の論ひ直されとる辨ふ疑齋の書をく論ひて悉く當れる說ふ已然きども其當れ已と云ゝ世間ふし竝とる漢人流の議論ゝ當れるふて古意を以て見れど猶當ざふ事も多ゝ已其ゝ古語拾遺の書ゟ思ふは古ふ

ゝらぢる誤も多けきども又中ふは珍らし已事の記紀ふは漏とふゞ此書ふ傳ハきる事も多ゝ已正史ふ違へ已とて必ふきを非とゝべきふ非ず古傳說ゝ正史ふ漏ある事も外どゝ無らむはと正史は違ひて加ふはられ書ふ正しく殘れる事もふぞゝ無らむさゆまと予この書を論ゝむふゝ此論ふ出ざる外ふ外ふ誤ゝふきゝれ有て古きふ論はれとる事ふゝ予りて然もゝらじと思ふこと多し

まゝ此書忌部を上げ過て實ふ違へ已と見ゆる事は信ふ多し然れども古きゝ必ちも有ぢ文おれゝらの勢外已いのふを云ふ侮ゝ神代ふおゝて中臣と忌部とれ等差は此の論ふ云きとる如く忌部ゝや下已とゆ然

れどもはゝ大ゝゝ相並びて。等しく聞ゆる事もあるを。中臣は榮えを云ばかりあゝく。忌部の衰へたゝを形し。彼神代のけぢめの比あらむや。然まだ他をも見てゐ。此忌部はおとろ弱たゝいゝ〳〵かれたゝく。歎ゝはたゝき事あまバ。まし天其家の人は歎きはいとゝおゝわりある事ゐて。其ゐ付てたゝいち〳〵ゝ言過しゝる事も。おの〳〵ゝ有ばきわざあり。まゝ信ゝ此書ゝ云る如くある事もあどれりし事も有まじきゐ非ず。朝廷ゐ奉る書ゐひゝさゝきて。曲理あき事を申ゝべゝ。ゝ非ざれば。後世の今ゝゝうしてた。謾ゝ論ひゝゝゝ抑古へは名家どもは。必榮ゆばきゝ甚く衰きものゝゝ。

弱方ゐしとは云弱ども。然りとて。其家ゐ生きて。衰へゝゝるをも憂へゝ。絶ゐむゝゝゝるをも歎ゝゝゝいたゆる命也として。安むじ居らむた。先祖弱不孝はいゝとりゐ。まゝ身の貧しく。賤きを愁へざるも。父母先祖へは太じき不孝ゐり。不義を行ひて。富貴を求ゝゝむこそ惡ゝゝゝ及べき限りは。力を尽して身をも栄やし。家をも起さむこそ。父母先祖への孝ゐた有ゝゝれ。然ゝゝ天命ゐ安むゝゝと云を。いみじき事ゝゐて。父母先祖へ不孝ゝゐるこゝを顧こゝゝ。ひゝゝゝ己ゝ潔白ゐる名をのみむさゝゝ漢国人の議論た。いゝゝ〳〵ゝ。然ゐゐ此疑齋は論た。漢意は議論ゐさゝ事ゐゆゝゝし。

ゐはみ泥こて。人情を思ひはのらゝゝ信の道ゐゝゝゝ說ゐ。此書忌部を上げ過ゝゝるた。少いかゝゝゝるやゝゐきども。廣成の身ゐゐゝを見ればゝも有ばき事ゐれば。深

く咎べきふにあらぬも亦共ふ。彼家の衰微をこそ歎くべ
き事ぞかなる。此論は。廣成の。忌部を上げ過さる怪憎む
あはれふ。おれがうら又忌部殘下し過ぎ。廣成を訕れ過
ぎるなどと思む多かれども。同じ過しとは中ふ。廣成の過
ちとは理て順ふるを。此論の過しぬるは。逆よして。
理ぞくぞ思はるゝ。ぞ云れしは信ふ然る說ぞかれども。ふ
疑齋ふ。廣成を罵りて妄といひ。迂と云ひ。多詐狡猾といひ。其言公私相倒。敘次錯乱。既に刺後神宮而却先其私何其自戻也。古人比皆目睫其有之哉。彼自謂齡逾八十意者此其言之耄耋。然則彼官賤秩薄無乃為戚戚貧賤思慮爽昏卒失其言乎。ふど云るは。酷とも酷と云べし。阿彼れ勝皇てふ人は。味きれく情れき人ふゆゆれ。○師の辨書は。那佐氏へ送らきとるふ。其答は外ゆうりき。と石原正明ゞ語ぞし。猶この古語拾遺の事ふ就

て。委く論ひ記せる事の有るを。既よ古史徵の開題記よ取りて。世ふ弘めとゝる事ふれど。此ふ省きとる事多し。彼書と見合せて心得べし。○小山連。此は姓氏錄左京天神ふ。小山連高御魂命子。櫛玉命之後也。と有ふ依て記せぞ。和名抄ふ。遠江國周智郡小山乎也郷あり。此氏は。決く此地名よ依れるふかゞ。後よ左京と津國とふ移きぞとおぞや。其は同錄ふ。津國ふも。小山連高魂命子。櫛玉命之後也ぞ有て。其よ並ぶて。佐夜部首。といふ姓を載らきとる。此も遠江國の地名よ依れふかゞ。後ふ津國ふ移きふれきぞ。其由は。成務天皇卷。遠江國造の下ふ注ぞを見ふべし。○日置部。此は姓氏錄和泉國雜姓よ。日置部天櫛玉命男。天櫛耳命之後也。と有ふ依て

記せり。神名式。近江国高嶋郡に日置神社。信濃国更級郡に。日置神社。帳考に。今ヒキと云。若狭国大飯郡に日置神社。加賀国江沼郡に日置神社。今在小松那谷傍と帳考に云り。越中国新川郡に日置神社。帳考に。今在日置村と云。續後紀承和十二年九月。奉授越中国新川郡无位日置神従五位下。清和天皇紀。貞觀二年五月。日置神授従五位上。同九年二月。授従四位下日置神従四位上。と見えまと式に。尾張国愛智郡に日置神社。帳考に。今在日置村と云。頭注に。市部庄日置村。今称山田庄俗称千本松八幡姓氏録。日置朝臣。應神天皇皇子。大山守王之後也。続日本紀合。出雲風土記。神門郡日置郷。郡家正東四里。志紀島宮御宇天皇之御世。日置伴部等所遣來宿停而為政之所也。故云日置郷と有り。但し今本。日字を脱せり。と式に。但馬国氣多郡に日置神社あり。和名抄に。大和国葛上郡日置。伊勢国壹志郡日置。比於木。尾張国海部郡日置。安房国長狭郡日置。能登国珠洲郡日置。比於岐。越後国蒲原郡日置。比於木。出雲国神門郡日置。丹波国多紀郡日置。丹後国與謝郡日置。周防国佐波郡日置。比於木。肥後国玉名郡日置。薩摩国に日置郡あり。また薩摩郡に日置郷もあり。○白堤首。此も姓氏録大和国天神に。白堤首。天櫛玉命八世孫。大熊命之後也。と有に依て記せり。此も決て地名なれば。未考得安。神名式同国山邊郡に。白堤神社あり。舊古の邊地地名なりしが。亡ぶ失れるなし。鄰郡高市郡に式に櫛玉命神社あり。

由りの為事なり。○葛野鴨縣主。おて神代系紀ふ。神皇産靈尊兒。天神玉命。葛野鴨縣主等祖と見え。天神本紀ふはと もかく有り。はと天神本紀ふ。天櫛玉命。鴨縣主等祖。ぞを有ふ依て載せゆ。是を以て。神玉命。櫛玉命。同神なること知られと。此同神れまぞ。太玉命とも同神れるおぞ論おきを。おを穴師。神主の下ふ云を。合せ考ふべし。葛野て。和名抄ふ。山城國葛野郡。葛野加度乃。とりの為是ふゆ。鴨と云も地名なり。此等の地名れ事て。神武天皇卷。鴨縣主れ処ふ委く注べし。けて此氏て。姓氏錄山城國天神ふ。加茂縣主神魂命孫。武津之身命之後也。まと鴨縣主とも書り。同こぞなり。ぞ見る即おを ふて。武津之身命と云は。天神玉命亦名天櫛玉命。れ子れ為こと灼焉し。其て天神玉命ぞ云も。天櫛玉命と云も。共ふ産靈

神の子と有て。但て櫛玉命と云を。姓氏錄ふ。高魂命。子と云ひ。天神玉命ぞ云なバ。神代系紀ふ。神皇産靈。爺兒と有ふ。拘る法ら ぬ由て。既ふ上ふ云ゆき。何ぞも鴨縣主祖とりる。其鴨氏を。姓氏錄ふ。神魂命孫。武津之身命之後也ぞ有をも て。産靈神之御子。天太玉命亦名天櫛玉命。之子。建角見命と。次第ばきおぞを知ばと。ふを鴨縣主の事て。神武天皇卷ふ委くいふ故ふ此ふと ど。其出自をれと注し於。○久我直。おて天神本紀ふ。天神立命。山代久我直等祖。とりの為をと。て載せゆ。神代系紀ふもかく見る。天神立命ぞある て誤きる傳なり。此れやがて建角見命ふて。産靈神ふて。孫ふ坐ものをや。久我て。山城國の地名なり。其て山城風土記ふ。加茂建角見命。宿坐大倭葛木山之峯。自彼峯漸遷至山代國岡田之加茂。神名式ふ。

相楽郡に岡田鴨神社あり。隨山代河下坐葛野河與加茂川に會云く。自彼川上坐定坐久我国之北山基從爾時名曰加茂也と見えて。久我は。加茂の舊名なるべし。神名式に山城国愛宕郡に久我神社あり。賀茂別雷神社賀茂御祖神社を當郡に在り。久我社は御祖社の北に在りと。清和天皇紀に貞觀元年正月。久我神授從五位下を見も。此社の祭神を釋紀に建角身命山城国愛宕郡久我神社と云り。神名式頭注に久我社建角身命也といふ。是を以て天神立命。建角身命。同神なるを知られぬ。なほ乙訓郡にも久何神社あり。今在下島羽西久我村と帳考にいへり。さて清和天皇紀に貞觀八年八月授山城国正六位上興我萬代継神從五位下。同十六年閏四月授山城国興我万代継神從五位上と見えたる神を。或説に今上久我に在り。菱妻明神と称して土人生土神とも。例祭四月巳日なり。此社の地は久我社といふ。六帖に光俊哥に木くれて紅葉せり久我の杜淀のわたりや時雨ちらむ。同書に大伴郎女いとねやも鳴ぬる鴈ゝ久我の杜木ゝハ多葛もぬみぢにけるかくに詠歌を思ふに興我万代継神と云て久我神社を申べきと信友云り。けて久我の地は。古は久我国をさ云なるに他書にいまだ此地は事見當らず。○葛城直は姓氏録津国雑姓に葛城直天神立命之後也とあり。然きて此氏も建角身命亦名天神立命はは商なれば。上に引る山城風土記に建角身命。宿坐大倭国葛木山之峯とあるを思ひ合べし。○此氏の事は神武天皇巻に以劔根命定賜葛城国造とある下に委く注ふべし。○役直は姓氏録河内国天神に葛木直に並べて役直高御

魂命孫。天押立命之後也。と有よ依て載せ卍。一本ふ天押立命を天神立命と作りそれも惡からぬ此氏は古也。元正天皇紀養老三年七月の處ふ。從六位上賀茂役首石穗。正六位下千羽三千石等。一百六十人賜賀茂役君姓。と有卍。もと首の姓ありしが君姓を賜へる由あり。此ふ依て按ふふ。役直氏は賀茂氏をゆ出とる複姓ふて。正しくは賀茂役直と云べきを省略て役直とは云稱るふて。中臣志悲連を。唯ふ志悲連と稱ひ。物部弓削連を。唯よ弓削連と稱ふ類ふ卍れゆ。ふ例はいと多うる字。今は一二を挙て誨し故。然れど此氏も。天神玉命亦名天櫛玉命。は裔よ。天押立命也云は。やがて建角身命亦名天太玉命。神立命。の亦名ふると論ひふ

志。姓氏録よ。建角身命と云をも。天押立命と云をも。共よ產靈神の孫と云ふ。ふもとく符へ卍。但し高魂命孫と云ふ。拘るに。いひ。神魂命孫也云るよ。拘るに。らぬ由は。既ふ注へ依が如し。○矢田部。ふは姓氏録山城國天神よ。矢田部鴨縣主同祖。鴨建津之身命之後也。と有ふと卍て載ふ卍。矢田てふ地名は多うれど。此は和名抄よ。大和國添下郡ふ矢田郷あり。此地名ふ依れる氏名卍。其は神名式よ。同郡よ。矢田坐久志玉比古神社二座。並大月次新嘗。也ひゆ。清和天皇紀ふ。貞觀元年正月。矢田久志玉比古神。從五位上と見ゆ。河内志よ。今称矢田村矢落明神といへり。此は櫛玉命亦名太玉命。を祭ふ依社ふ依べし。一座は。その后神ふもや有らむ。は。と式ふ。丹後國丹波郡ふ。矢田神社。熊野郡よも矢田神社あ卍。ま

名大和国廣瀬郡ゑ。櫛玉比女命神社と云もの。此社も天村と云ふ在て。辨天宮を称ひとぞ。伊豫国風早郡ゑも。櫛玉比賣命神社あり。文德天皇紀。齊衡元年三月。授伊豫国櫛玉姫神従五位下とあり。此も太玉命の妹櫛明玉命ゑやはと若くは。太玉命亦名櫛玉命。は后神ゑらむも知ぬべらば。夫婦兄弟同名をもて称へる例も。宇佐都比古宇佐都比賣阿蘇都比古阿蘇都比賣ゑどの類いと多くり。ちて矢田部氏は。建角見命は裔ゑれ其本ゑて。饒速日命の裔ゑも。矢田部氏あれども。彼も仁德天皇の御世ゑ。矢田皇女は。御名代の由ゑをもて負ぬれまむ末ゑ。をく本末を辨ふぬし。饒速日命の末は。矢田氏の事も。仁德天皇巻ゑ注べし。○纒向神主。ゑは天神本紀。

ゑ。天忍立命。纒向神主等祖と有をとて載せて。但し振魂命兒。と為とるも誤あり。此も上ゑ載とる。役直の條ゑ。高御魂命孫とてのゑぞ正しき傳ゑ。殊ゑ振魂命を。天神と為るも。姓氏錄。舊事紀ともゑ謬ゑて。案も綿津見命は子ゑ。ゑことと。上第廿五段。下第百六十二段ゑ。委く記せるグ如くゑ。をや。纒向も。釋紀ゑ引る大倭本記ゑ。天皇之始天降來之時。共副護齋鏡三面。予鈴一合云く。一鏡及子鈴者。天皇御食津神云く。今巻向穴師社大神也と見え。神名式ゑ。大和国城上郡ゑ。穴師坐兵主神社。ゑまゑ竝びて。巻向坐若御魂神社。大月次相嘗。新嘗。ゑ見えと。ゑ社の坐ゑ地ゑて。即ゑの巻向社の神主祖ゑ。ゑ由ゑ。此御社も事も。下第百三十四段ゑ。委く注べし。○穴師神主。ゑは姓氏錄和泉国神別。ゑ。穴師神主。天富貴命五世

孫。古佐麻豆知命之後也。と有ふ依て載せ。但し此を天孫部ふ收られとる誤あり。天神部よこそ收らはるべれ。神名式ふ。和泉国和泉郡ふ泉穴師神社二座とあり。此社ふ仕奉る神主ふりまと此社ふ並びて兵主神社もあり。ちて此社を。上ふ擧ふ。大和国の巻向穴師社を移し齋へる故ふ。泉穴師神社を稱ふと通もれど。其例いと多し。

古代神主は。大和ふ纒向神主と同族ふて。太玉命の裔ふ依ふを疑ふし。令集解仲冬上卯。相嘗祭の條ふ。釈云。大倭社。大倭忌寸祭云。穴師神主。巻向神主。恩智神主云。已上神主等。請受官幣帛祭と云ふ事あり。其をまた纒向神主ゞ祖とあり。依天忍立命。やゞて建角身命。亦名天神立命ふ坐し。此命やゞて神玉命。亦名櫛玉命。此子ふ依ふを。上ふ次く辨と

る如く。別依を。其裔とある纒向神主と。同族ふるばき穴師神主ゞ祖ふ。天富貴命といへるを熟思ふばし。神玉命。やゞて太玉命ふ依ふを疑ふし。其を古語拾遺ふ。太玉命之孫。天富命と有ふて。更ふ疑ふき物ぞ。式ふ若狭国遠敷郡。阿奈志神社。伊賀国阿拝郡ふも。穴石神社と称ふあり。同神ふるふや。ちて太玉命は御末の。かく神主を別を依事を。彼石屋隱の度ふ。御幣を獻を給依を。り起を。下ふ三輪大物主神を祭り給へる事を云る處ふ。御手代として祭り給へを。と有ふどを思ふ。由縁ある依事ふりを。姓氏録ふ。大和国天神ふ。御手代首。天御中主命十世孫。天御諸命之後也と見え。此氏人の事。聖武天皇紀ふ。天平十年七

月。大倭御手代連麻呂女。賜宿河内国天神ふ。神人御手代、
祢姓と見えさるはえおり。
首同祖。可比良命之後也。と見えさ氏外ども。決定て太
玉命は御末ある様く所思もれど。據考ふばき便外し。御手
代首と云ひ。神人と云ひ。太玉命の御手代として。
大三輪神を祭りさるお由ありあとを思ふべし。さて豊
受太神宮儀式ふ。神祇官大史。忌部飛鳥田首野守と云人
見えと。此は神祇官の大史と有れど。疑ふく忌部の複
姓ふり。神名式ふ。山城国紀伊郡ふ。飛鳥田神社。一本柿本社。を
見ある社ふ。由ある姓ふ依べし。美濃国各務郡ふも。飛鳥
田神社あ。永万紀ふ。阿須賀社とあり。ふ第百四段。天
活玉命の下ふ注る説をも。合せ考ふ法し。

於是健速須佐之男命。被逐八
百萬神而。降坐出時。霖降出故。
結束青草。爲蓑笠而。於衆神宿
乞給矣。爾其神等。皆曰汝者躬
行惡而。見逐出神也。如何乞宿

於我而同距出。是以。雖甚雨降風吹。不得留休。辛苦而降坐矣。自爾以來。諱著蓑笠。入他人屋內。又諱負束草。入他人家內而。犯此者。必債解除。此太古出遺法也。

於是は。上五十九段の。八百万神。嘖速須佐之男命而云く。乃共神逐く降矣といふ文を受ゐて。○霖ハ和名抄ハ。兼名苑云。三日以上雨也。和名奈加阿女。爾雅註云。霖一名霪。久雨也。然るを私記ハ。都伊ちて須佐之男命は。逐れ給ふ時しも。かく霖降しを。偶ふ其時ハ逢へ依ハ非じ。此を決免て解除の驗ふをりて。速秋津日神の功徳と。須佐之男命は。犯し給へ依罪汚を。拂清免む料ハ。降し給ふる事と思を依。然るを浅原八郎ガ切腹のとき雨ふり。金毘羅祭の翌日もふり。

火災後ふれ。必ふる青草は字れはゝふ。阿遠久佐と訓ぢ
ふどを思ふべし。
し。野ふ生と依草を。其外ぐらふ結束とる外ア。○爲蓑笠
而て。蓑笠と著て青草を結束と依よて。實の蓑笠ふらぬ
を。蓑笠と爲て著給ふる由外ア。八尋弓を御杖と為して。
な。杖ふ突とアと云と有るも。弓て杖ふらぬ
ると。同格の言ふり。和名抄ふ。說文云。蓑和名美能。雨衣也。俗用蓑字。
毛詩註云。笠所以禦雨也和名加佐。を而ア。まと玉篇ふ。蓑草衣也と而り。袋草
子ふ。賤夫歌とて。時雨安依稻荷の山れ黃葉ハは。阿袁か
アしをり思ひ初てき是は泉式部ぐ。稻荷へ參アれ依ふ。
時雨のふけきぞ。道ふ逢りれ依牛飼童の。阿遠を脫て著
せとアれ依を被ア。嬉き事也と云て。止ける後ふ。ふれ

童式部ぐ許ふ來れれぞ。何事ふ外ど尋れ依よ。詠める歌
ふアア。便外き心の有けるとれむと有アア。阿袁を云名は。此
れ青草を結束と依故事をアア出と依名ふるべし。外ふ延
喜式ふ。登美蓑螻蓑ふど云ふ蓑而り。出羽の秋田ふて。今ふ多く蓑といふ物
の外ふ。計良と称ふ蓑て。常ふ見る如く直の蓑て。
ふる。計良てふ蓑て。著とる狀の。螻といふ虫の羽れ生
と依狀ふ似とれバ。笠は鬚と同訓ふて。鬚に物ふきぞ稱
ふ。延喜式ふ。菅笠藺笠ふぞ云ふ笠而り。此て今も有る物
見知れる物ふり。まと和名抄ふ。史記音義云。簦於保賀佐。笠有柄也と
而アア。此製は今知ぢらぞ。今有る傘。まと指ろさふぞ
躬行惡而て。斯和邪惡久氐と訓ぢし。字のまゝふ。躬行と云ふ物とて異ふりと聞也。○
訓むハ漢籍訓ふり。

○同距之は。神等各〻塞止めて。其屋内に入ざる由なり。
○不得留休とは。神等みな惡ひ屋借さゞる故に。留りて休給ふ事も得ざる由なり。然れど不得留休と訓まむは。漢籍訓なり。○辛苦而とは。多斯那美都〻と訓ばし。古あれち日本紀によりて訓ぶ。語の本は。手足惱ふるばし。心を用ふる事を。多斯奈美と云て。窘まと困字なども書くも。其事に因て。手足を惱ま語なるべく思ひ。けて此神の。かく辛苦み給ひ。少も荒ぶる御心を發し給はで。降給ふるは。能く其罪犯に伏ひ給へるに。即祓除の驗ありけり。あれ五十九段の傳に注へると合せ考ふべし。○他人は。比登と訓ばし。比登とは。我に對ふて。他を廣くいふ語なり。其由は。既に第五十五段に云へり。屋内は夜奴智と訓

み。家内は伊倍奴智と訓ばし。○東草は。大嘗祭式に。地數所謂阿都加。を。ぞ。ぬ。青草を束さる義に語と通ひれど。此に據て阿都加とも訓ばれど。猶都加具佐を訓べく所思ひ。舊訓はたくさけと訓り。けて万葉集十二卷に。久堅は雨の零日を我門に。蓑笠蒙ぶて來る人や誰。とぬれど。甚く人は忌とは事なり。其は此大神の。逐れ給へる時は狀に似あれど。[redacted]集に為家卿。雨衣笠著て内に入る事は。神逐ひたり忌むと云あり。家内は。て笠著ぬ物ぞなぎは。今も云ひ。神名式に。讃岐国寒川郡に。大蓑彦神社といふ有り。須佐之男命は由なれば。考證は。村民これを一宮を称ひ。猿田彦神を祭ると云へども。実記なし。宮中は霊泉あり。常に覆ひて見ぬ事を許さば。

往年散齋といふ儒者杖を探り見しに忽に目に成とりて弥く人畏をおぼえと云ひ當国の式内神社考に石田村の蓑神池と云ふ社を池の西れ小山れ上ふあり此神れ御名ふをりて池を蓑神と申ぼふやと云ひまさ此国の事記せる綱目といふ書に古れ高山れ上に在し往還れ乗馬を崇め給ふ依て今の宮地に迁せりと云ひ。○債解除れ此遺法を犯せ法人ふ解除れ贖物を出さむ法ふ云ふ。今集解に債徴貭也と有りて今もいふ語あり。ハタルと云言の意を剝取と云ふ事か未だ考へず。古へふ此事れ多有しかど孝徳天皇紀二年三月甲申日れ詔の末ふる六條を見て知ばし。○鐵胤云。ふ〜ふ釋紀に引ふ法備後風土記ふ記せ法武塔天神の古事は速須佐之男命の天をり降ひ給へる時れ古傳れ紛れふ法ばきをし考ず記さきはと此神を牛頭天王と云ひ。

まと頗梨采女ハ將神れぞ云を曆神と稱ぼる事れ吉備公れ所爲ふる由をも委く考ず記さきと法ば先ふ京人江戸爲之ば需ふ依て右の考説を牛頭天王曆神辨と名けて一卷と爲し既に上木して世に弘めと法事ふきぞ。此ふれ除き扨其説を見むと思ハむ人はそれ曆神辨ふ就て見法ばし。

是後速須佐之男命詔曰。我被逐諸神而今當永去。如何不相

見我姉命而。徑去歟云而。迺復上詣天出時。天宇受賣命見出。告日神則。詔曰吾那勢命。上來出故者。非復好意矣。爾速須佐出男命。白天照大御神曰。吾更昇來由者。衆神處我以根國。故今當就去。不相見姉命則。不能忍離故。實以清心。復上來耳。今奉覲已訖則。隨衆神出意。當永歸根國。請姉命平安坐而。照臨

天国(アマツクニ)。且吾以清心(ワレモテキヨキコヽロヲ)所生(ウメル)児等(コドモハ)奉(タテマツルト)於姉命(ニナネノミコトニ)白而(マヲシテ)復還降焉(カヘリクダリマシレキ)。

是後とは。辛苦(タシナミ)なく降坐る後をいふ。○當永去(スルカタクニカラスト)は。豫美国(ヨミノクニ)永く去(カリ)給ふを云ふ。○姉命は。那禰能命(ナネノミコト)と訓べし天照大御神を宣ふ。○徑去(タヾニカラハヤ)歟とて。豫母都国(ヨモツクニ)ゆ去(カリ)坐ぬてて。永く大御神ゆ相見(アヒミエ)給ふ事能(アタ)はぢる故ゆ。御暇(ヒマ)請さでは。去がとく思召由(ヒ)あり。○詣は麻韋傳(マヰデ)と訓べし。參出れ義あり。麻宇傳といふて。後の音便言なり。○天宇受賣命。やがて大宮能

賣神ゆて。上五十七段ゆ注せ(ル)如く。大御神の御前ゆ侍(サモラ)ひて。大御心を執ぬ。參入(マヰリ)罷出(マカヅ)る人の選び所知(エラレシラ)し坐ぬ故ゆ。須佐之男神の。復上(カヘノボ)給へ(ル)を見て。告(ツゲ)し給へるれぬ。○大御神て。天日(アマツヒ)れ御国を治看(シロシメ)ば故ゆ。日神とも申せゆ。此事既ゆ上ゆ云へぬ。○非復好意(アラビキヨロコビ)とて。前ゆ甚く荒び坐る故ゆ。はと參來て。荒び給てむ(ル)ぞ所思召(オモホシ)せ(ル)ゆ。○衆神處我以根国(カミタチアレフネノクニ)て。神等我乎根国爾夜良布(カミタチアレヲネノクニニヤラフ)と訓べし。○奉觀(マツルコトヽミエ)て。漢籍ゆ。諸侯見天子(ニ)曰(ヒ)觀(ミエ)といひ。觀(ミエ)勤也ゆど有ゆ依て書れし字なり。○平安て。麻佐祁久(サケク)と訓ばし。和名抄ゆ。淡路国津名郡平安。阿惠加と見え。物語書ゆも。何ぞかと云ふ詞あれど。詳ならぬ詞ゆ依ゆとし。○吾所生(カウメルコ)児

等とは。大御神と御誓の間ふ。赤き清き御心の祥と。吹生レ坐る五柱の男子を言ヲ。奉レ於姉命ニと白し給へ。御言れ中ふ。自ら大御神ふ。御子ども。を哀と御覽し育給む事を。言遺し給ふ御情のみど見えて。甚も哀ふ悲し。御言ふぞ有ける。○纂疏ふ。請平安而照臨天国者。祝禱之詞。進雄尊。臨別遺以此語。恭順之意溢於言外。又以所生男兒付囑日神。後代百王。皆出自其孫子。且其所寶神器。皆以進雄尊爲之物。根蓋此尊有大功于邦者。不可得而稱也。とあるは。實然る說ふ。神器とは。謂ゆる三種の神宝をいふ。鏡玉共ふ。須佐之男命は中ふ。御剣は只ふ。進とり事起りて。出來とる御宝ふ。大蛇の尾とり取出給へりと有きど。実ふは此も其本は。

此大神れ御進びふ依て作きる御剣ふ。其由第七十九段ふ注ふを見べし。

是時天照大御神。於先與須佐之男命。誓而生坐。出三柱女神。授須佐之男命而。汝三神。宜降居道中。奉助皇美麻命而。爲

皇美麻命。所祭也。教給矣。今在海北道中。號曰道主貴。此水沼君等出所祭神也。此三柱神。示謂須勢理毘賣命。

是時とて。須佐之男命の還降とのふ時をいふ。○於先生坐之女神をて。互ふ御誓まして生坐る。多紀理毘賣命。狹依毘賣命。多岐都比賣命。三柱を申ス。○授て多麻比と訓ばし。賜の義ル。また佐豆祁と訓むも惡ろらば。佐て眞ふ通ふ詞。豆祁て付あれむあり。然きどあ不多麻比や勝り幽べき。○道中とは。下文ふ海北道中と有ふ同じ。其處ふ云ばし。○皇美麻命をて。此よては。天忍穗耳命を詔へル。日本紀ふ皇孫と書れ。祝詞式ふて。皇御孫命とあ因て。皇美麻命を書とり。續紀の宣命ふ。抑須賣美麻と中美麻乃弥已止とのル。訓て此ふ依べし。抑須賣美麻と中ス須賣て。天皇命。皇神あどの須賣と同く。岡部翁說ふ。統ちふ事あルとのる如く尊みて冠とる語。天皇命の事て。第百九四段ふ注を見るべし。美麻て。御眞子を畧て。麻奈子と云ふふ同じ。其は万葉十九ふ。山上憶良の。霍公鳥を詠る歌ふ。古

昔も語ひ繼ぎ為る鶯之宇都之眞子可母云々と有ひ。師云、宇都之む、現あらむと有り。此む若くむ之は乃ふて、ウツノヽゴあらむゥも。此む九巻ふ人あらば母之最愛子曾とを免るはあざと同じく。愛親しみ稱ふ依語ふひ。猶云ちゞ上ふ引る眞子を、今俗ふいふ孫のあとありと云も有むゥ。其むまさ方葉九ふ鶯の生卵れ中ふ霍公鳥獨生きてあゲ父ふ似てむ鳴ゲば云ゝと有るを以て、眞子と云ハ、あゲ母ふ似てむ鳴ゲば云ゝと有るを以て、眞子と云ハ、俗ふ云孫れ義ふむ非ざる事を悟べし又麻奈子む、眞之子の義ふるあとハ、第十一段ふ既ふ注りき。故皇美麻命と白ひ言は、天忍穗耳命の御事を詔給へるゲ始ふて。大御神の日嗣を知看ひ。御ゝ代ゝれ天皇命の大御稱と成れひ。スメミヽとれみ云て命と云ざふむ書紀ふ皇孫と書きとるふ惑へるあり。彼をもスメミヽノミコトを訓べし。続紀ふ美麻乃弥己止とあり。御眞之命の義あらむ。然るは。天日嗣知看ひ皇む。御ゝ代ゝみ御。大御神の御眞子ふ坐ぢあひ。其は大御孫邇ゝ藝命。御天降れ時ふ。大御神れ御語ふ。我宇都御子と詔ふるを以て。御ゝ代ゝれ天皇命とちふ通る語ふるを。思ひ辨ふ淆し。然るを師説ふ。皇御孫命とむ。迩迩藝命を始免て。と云ひ。孫を麻とのみ云むむ心得ゲとれれど。未考得ぬを言れとき。日本紀ふ謬りて。美麻ふ孫字を當て。皇孫。天孫ふ。ど書れ。ちゝバ。此紀を。ひ後ふ記せる書等。にふ其ふ習ひて。皇孫とも。皇御孫とも書て。迩ゝ藝命をり。白し始と。ふる事と思ひ誤ひ。古語拾遺ふ。天照大神。高皇產靈神。二神之孫。故曰。皇孫とさへ記きしとり。誤られとる説ふり。然れど。孫を。む古語ふ。比古とふそ云ふ。麻古とむ云ひ。其む麻古と云は。眞子の義ふて。生子をり。次ゝ。子孫を博ゝ云ふ語ふ。きバふり。和名抄ふ。孫。和名無万古。一云比古。曾孫。和名比比古と有れど。孫を麻基と云む。奈良の頃ふどをりいふ。語ふて。後ふきむ。一云比古をるぞ正しき。師も此旨を得らきゞて。山蔭ふ。神代紀の一書ふ。瓊ゝ杵。尊の未生れ

給む処ゐ天孫とあるを難免て此時天孫も未生を坐さぬいうぐと言れしむ忍穂耳命の御事を白せりとしも思れざ已しあり。○さて又和名抄ゑ無万古ゑある例ふて宇万古あらむ。は梅を無女馬を牟麻あどあるる例ふて宇万古あらむ。然も有らむ眞といふ語む宇麻の畧語りて可美と同語あらむも知ぬらぬ其ハとまれ師説ゐ孫を麻碁を云む無麻碁の訛と言れしは信らを安さて又師説ゐ書紀ゐ天孫ともあるむ古言ゐ非安此む天神之御子を例の漢免ろしく宇蘭ゐ書れさる物あり阿麻都加美能○宜美古と訓ぬし阿米美麻と訓むむ非あめ。とあ已。

奉助皇美麻命而。爲皇美麻命所祭とは。皇美麻命ハ御手ゐ代り助奉已て。宜所祭と敎給へ爲りて。其ハ誰神を所祭れと詔ふ事ぞと考ふるゐ。下ゐ引く大同本記の傳ゐ依きむ。豐宇氣毘賣神を祭已給ゑ之の御命ゐぞ有れる。為は美多米と訓べし。世〻の紀ゐ奉為と書て。ミタメと訓とる例あり。所祭を元書ゐ所祭を訓とるハ甚じき非

ゐ已。然ゐハ今古ゑ詔ハ祢。後ゐ皇美麻命を天降し奉已給ひて。葦原中国の君と立給ハむの御心ハ。此時既ゐ御有せれむゐ已。其ハ彼御天降ハ事を詔ひ出とる時ゐ。豐葦原水穂国者。我御子之可知国也。と依し給へハ御言を熟思ふべし。皇美麻命ハ水穂国を知看ハ事ハ早く定まれハ幽契ゐハ趣ハ御言ゐる歟や。此事既ゐ第三十五段ゐも且くハ云へり。ハ委くは第百六段ゐ注ふを見べし。何の由ゐて。豐宇氣毘賣神を二柱女神とちゐ祭し免給ゑハ事と恐く考ふるゐ。豐宇氣毘賣神ハ。須佐之男命ゐ殺さえ給ゑるゐ依て。其御德の顯れ給へハを。大御神の。彼種等を殖給へハゐ。須佐之男命。其をも

害給へるゆ。祓ひ態は依て。悔伏ひ坐せるを。三柱女神は。須佐之男命の御子ゆまませず。親神の罪犯し多祈請ひと。とく豊宇氣神ひ御心を執白さむ事を。思召ゐての御事ゆや。とぞ想ひ奉らゆ〳〵。此ひ甚く臆度る説ひ如く思ふも有ばけまど。斯をり外ゆ想像り奉るべき事ゆし。○今在海北道中と云へゆ。今は。此傳を記せ流時を云ゆり。海北道中は。纂疏ゆ。謂九州之北瀬海之地也と見え。師説ゆ。筑紫の北面ひ海路ゆて。即胸形宮其處ゆ。道中とは。韓国ゆ渡る海路ゆを云ふと有るゆ如し。但〳〵其ひ外国の防護の為ゆ降居し給ふひ。故奉助天孫とひ詔へり。と言れし説ひ然らば。○道主貴ひ道ひ。国を云ゆ。此ひ師説あり。水垣宮段東方十二道を有る処ゆ。委く云を見る。

し。筑紫の国中ゆ宇須波伎坐まひ義をもて稱へ奉れる御名ゆるべし開化天皇ひ御孫ゆ丹波美知能宇斯王と申ひを道主命とも書れゆを以て知ゆし。貴の義ひ上ゆ註ゆり。第廿六段大日霎貴命の処見るべし。ひて此御名ひ三柱ひ一柱と坐ませゆゆ就て。申せゆ御名ゆり。其由下ゆ。大同本記を引て云を見るゆし。○水沼君は。舊事紀ゆ。景行天皇の御子ゆ。武国凝別命と申ひ有て。筑紫水間君祖と有て。景行天皇紀ゆ。国乳別皇子是水沼別之始祖也を見り。和名抄ゆ。筑後国三潴郡美無万と有て。万葉集十九巻ゆ。水鳥ひ去ぬく水奴麻云〳〵。を有る是ゆて。胸形宮ひ社人胸肩

氏を左座とし。水沼氏を右座と爲ぞ。胸肩氏の此宮に奉仕の由緒を。上第三十六段に云ふる如く詳あはを。水沼氏れ奉仕る由緒は。知ばからば。○此三柱れ女神を。一柱ふ都て。須勢理毘賣命と謂ぞ事ハ。大同本記ふ。雄畧天皇れ御世ふ。大御神の。豐宇氣神を。伊勢ふ迎はく欲せふ由を詔へふ御語ふ。吾高天原爾在時素盞嗚尊乃十握劔索取。三段に打折氏。所生三女神乎。宇佐嶋降居道中奉助天孫而。爲天孫所祭止詔之神。あの神れ。下文ある止今丹波國與佐乃比沼乃眞魚井坐。これ坐は。上の云く止詔之神と而の与佐れ比沼の眞魚井ふ坐まば。と云るあり。下文の須勢理ふ係る坐ふ非ぞ思ひ紛べらば須勢理

姫乃齋奉ふの七字を。上文れ詔之と云まで文ふ合せ考へて。三女神やの て須勢理毘賣命ふる事を。思ひ辨ふべし。御饌都神。止由居乃神乎。吾坐國欲止誨覺給支と見え。此文れ。神名式考證ふ引さるを。校合せて引さり。徵ふ引さるは。其異本あり。されど義れ互ふ異るこを れし。彼書ふ就て見るべし。はと同事を。御鎮座次第記ふ。丹波國與佐之小見比沼之魚井原坐。道主貴乃齋奉御饌都神。止由氣神乎。我坐國欲度誨覺給支と而ア。魚井原坐れ。道主貴乃齋奉といふ六字を隔て。御饌都云くふ係る此を合せ見るふ。大同本記ふ。須こと上ふ云ふるが如し。勢理姫と有を。次第記ふ道主貴と而ア。道主貴とは。三女神を。一柱を爲て申ば御名あまぞ。須勢理姫を申ぞれ。三女神を都とる亦名れるふを論ひふし。然るを記傳二十二巻ふ。外宮の書

ども、豊受大神の丹波より坐し間れ事を云とて、丹波道主命れ事を牽くせ、道主と云名ふ因て、また彼三女神の御事をさへ率よせて、また丹波道主命の名をも、丹波道主貴と云て、彼大神を齋祭と乃ひし事を云へるも、皆、丹波の因くり附會さる物ふして、いみおき妄説ありとなり。丹波道主命を附會ある。と言れしは然る説れをぞ、三女神れ事も、附會ふ非ず、其れ大同本記も、正しき古書や聞ゆふ、上より挙ふ如く有きば、此は附會ふも非ざりれ。

此は和多都美神三柱を都て、大綿津見命とも、豊玉彦命とも申て、一柱ふ坐けと同例ふ。餘ふも例も多ふを、今も此一ッを挙て證とし侍。偖おれ須勢理毘賣命の、豊宇氣神を所祭ゆ給へ爲は、須佐之男命の、現国ふ御坐せる間れ事ふて、須佐之男命れ、豫母都国ふ住坐せる時ふも、共ふ彼国ふ往坐けゆ。おれ往坐しの時ふ、御身れ形を遺し給へふ、是胸形といふ地名れ起ふる事、第三十六段ふ既ふ云へり。また春日社ふ

始め、諸国ふ、御名を申さば、唯ふ比賣神とれみ称して齋き奉れるも、大抵この三柱の女神ふ坐まれ事、と思ふ由有り。此は猶よく考ゆて、其処〻ゆ注ふぼし。故大国主神の豫美国ふ往坐せふ時ふ、彼国ふ御坐して、御合坐せゆし事、第八十三段ふ見え為ふゲ如し。おゐ第百段、第百三段ふどの傳ふも、考へと申れも、三女神の一神を坐ませる時の御名ふる事を註せる説ども有り。合せ見て須勢理毘賣思ひ定め、また雄略天皇二十二年ふ、丹波国をり、豊宇気神を迂奉れる処れ傳ふ注ふ説ども、彼も合せ考ふぼし。

於是健速須佐之男命、帥其子五十猛神、天壁立極廻坐而降

到於新羅国居曾尸茂梨之處
而乃興言曰此地吾不欲居詔
而以埴作舟而乘之東渡來坐
出雲国安來之埃川上而吾
御心者安平成焉詔矣故其地

云安來也

於是乃前の段に復還降焉とある文を受て也。○五十猛
神と白れた大禍津日神の亦名なる事。また此神を須佐
之男命の御子と申る由も既に註へ也。第廿四段の傳見
た須佐之男命の荒御魂は坐まる故に帥て坐しるべし。しかて此神
らば。まと帥て降り共に天下を廻り給へる例なり。○天壁
立極壁字は天之壁立神と云る書と同例あり。記傳に風
土記本文を引れと同ふ。天壁立廻坐と有れど。曾伎とも
訓ぢれまど伊勢の大御神は白れる祝詞に。天能壁立極国
能退立限云々を有るは。正に加倍と訓ぢれまば。此も壁

立極と訓ばし加茂翁云。天壁立極とは天の壁れ如く。四方ふ側て見もはを云ひ。国退立限りは遠放立をゆ。万葉ふ同じ言を天雲れ曽久敝れ極。天雲れ遠隔れ極遠けど。ふど有ア。同言れア。仁徳天皇巻の歌ふ雲離れ曽岐を。アをも。と有も同じ。立れ壁立れ立れ如し。と言をあはが如し。まと青雲の靄く極み。白雲の墜坐向伏安限りふど云も同じ類れ言ふり。偖かく天れ壁立極を廻り坐る事は。何の由ふらむと云ふふ。此神れしも。伊邪那岐命れ宇都御子ふ坐まし。青海原淖之八百重を知看せとふ御命蒙り給へはを。幽き妙ふはを契有て。豫母都国ふ往坐まく欲し。此淡き由の事れ。第三十段ふ委く注へるを見べし。御父乃大

神の御許あアて。天照大御神ふ御暇請さむと。高天原ふ昇坐し。御誓れ間ふ男子生坐し。宇氣母智神れ事ふ依て。甚く御荒び坐とはが。解除事ふ験有て。御心和み坐しゥば。此時ふむ。御父れ大神の。淖之八百重を知らせと言依ふ給ア事を思おぎて。天下は。後ふ吾が兒ふ知らせ給てむと定給へはは物ゥら。蕃国くいゥふ成れると。まお盡くふ見置給てむとて。廻ア給へる事と知らきとゆ。猶次くふ思ひ合べき事のアふる。其條ふ注ふを見て知はべし。○新羅国師云。新羅れ斯良岐と訓ア。名義は即字音を用とはは成べし。姓氏録ふ。新良貴を云姓アア。今云。此姓の事れ。神武天皇巻ふ註ふを見べし。出雲風土記ふ。拷

衾志羅紀乃三埼[redacted]天皇卷ふ。新良万葉三ふ。栲角乃新羅国從あどゐの卍書紀ふ斯羅とも書と卍。雞林とゐふも此国ゑ事ゆ。或説ふ。新羅ゑ斯良ゑ訓べし岐ゑ俱尓の約りとるふて。斯良岐ゑ。新羅国の謂あきむ。斯良岐之国とゑ云ふきふ非ぬと云り。是も一卍と卍理とる説ゆり。斯羅。新良あども書き。漢籍ふ斯盧国とも云ふきむ。斯良と云むこゑ然め有べし。然れども皇国言ふ。正しく斯良ゑ云る例を未見ぬ。乃と百濟高麗を。久陀良岐古麻岐と云ふ例も無れむ。斯良れみ国を岐と云むもいかゞ。あり。然きむ岐ゑとひ。本ゑ国の謂ふも有きと云むふ。久陀良古麻ゑ並ばて。斯良岐ゑ云來ぬきむ。斯良岐之国と云むふ。ゆ。ゆでふ事ゝ有む。国名の淡海は。即淡海あきども。其海をむ。ゐふみの海と云るふ非ぬや万葉三卷の哥ゐふも。レラギノクニユゑあそ訓べれ。レラノクニヨりと訓むゑいかゞゆり。ちて其初ゑ。須佐之男命降到して。其後ふ。少毘古那命ゑ天降坐て。三韓をも漢国をも。其餘の諸国を

め。皆經營賜へふゆる。ばし。斯て漢籍どもふ云ふる。三韓を。箕子ふ封せしふど云も。皆の事ども。かゆ周武王ゲ朝鮮其ゑり遙ふ後の事ぞかし。皆ゑ言れとふ。皆然ふ説ふて。此時ゑ韓国ふ。いまゐ人種も無卍しふゆ。然るふ皇国ゑ。伊邪那岐伊邪那美二柱神ゑ生成給ひて。人種も早く生置給へきど。壹岐津嶋を卍向ふふ国くは。淳沫ゑ凝成れふ国くふて。此時しも。いまゞ神の經營給ハざ卍しろば外卍。ゆ。ゐ此国の事ゑ。神武天皇卷。まと仲哀天皇卷。まと欽明天皇卷ふどふ出さり。其処くゆ傳ふ注ふを見ばし。○曾尸茂梨之處は。纂疏ふ。在新羅之地名と説れし。然も有ばし。口訣ふ。荒芒之地。猶言薤宍之空国也。ゑ卍ゐるゑ信ぬとし。谷川氏の説ふ。見林曰。高麗曲有蘇志摩利。或云迴庭楽。蓋素盞嗚尊所作楽也。貴音載在仁智要録。といへり。曾て其舞の図を閲るふ。蓑笠を著て屈折せ

り。素盞嗚尊の流離辛苦は躰を摸せるなり。と云へるは。由有げなる事なり。然れど此曲を。素盞嗚尊の所作と云ふことと信ずとし。若実ふ彼神の故事ふをれば曲有む。ちて。ふは。後人は其故事を思ひて。作れはよぞ有べき。地名の下ふ。之處と云例は。古事記ふも。島上地。須賀地ふぞれふ多かり。此の之處を證として訓ばし。西大寺資財流記帳。高麗樂具は中ふ。蘇志麻理縣笠二蓋。各皂羅衣。とあり。縣は懸は誤と見ゆ。考へ合はばし。○此地吾不欲居を宣ふは。淳沫は凝成れるを。未營成ざれば荒芝びてふは故ふ。居らはく欲し給はざはれり。○以埴作舟とは。埴土をもて御舟を作り給ふは由ふゆ。是ふ準ふて按ふば。彼磐船と云しも。決矣て同じ製にて。埴もて作れるず。磐と化まる物と

思はふ。然るは諸国は。神世の石舟と稱ひ傳ふは物の多かるず。皆元と石をもて作れる物をは見え出。埴もて作れはふの。石は化まる狀ふ見ゆ。と云ふば。或説ども。今西洋ふある諸国とり。参來は船ども。藥土をいふ物を塗りて。ふは准へて。以埴作舟謂以藥土塗舟也ふど云へるも有きど。甚も愚ふる説ふりろし。かくて後は。杵築大社記を見れば。大社の西方鶴山の麓は。天磐船あり。此は須佐之男命は。埴を作りて乘渡らせりし舟は。石と化まるふ。埴結同して有といへり。○東渡とは。新羅国は。皇国とり西ふ在はふ故ふ。彼国をゆ皇国ふ渡り坐るを。東渡とは云るり。○出雲国の名義は。後は見えと。○安來之埃之川上安來は。彼国風土記ふ。意宇郡安來郷。郡家東南二十七里一百八十歩云く。とはる是ふゆ。二十

七里一百八十歩は今道あてゝ四里半と三町許あり八十歩と云をり下文は下ゝ引さり。古は意宇郡ゝ屬ゼし歟。和名抄ゝ能義郡ゝ此郷名を出せゼ。此れ後ゝ意宇郡を分て能義郡を置れし故あり風土記を撰べる頃は九郡あゼし多延喜式をゼ十郡と成きり。今は字を八杉と書とぞ。風土記抄ゝ安來市同宮内和田黒島田六村也と見えとゆ。埃之川上は神代紀一書ゝ素戔嗚尊下到於安藝国可愛之川上云ゝ。可愛此云埃と異所の訓註ゝ見え神武天皇紀ゝも埃宮を石ゼ今は其ゝ拠きゼ。を藤原宣昌といふ人は考ゑゝ安藝国は夜須藝乃玖邇を訓ぜし。出雲風土記あゝ意宇郡安來郷を云へゼ郷を国と稱ふこゝ舊證多し。今は能義郡ゝ屬て八杉郷といふ。即是あゼ。先輩みゝ文字ゝ泥みて山陽道ある安藝国と紛へて其正を失ひ拾芥抄ゝ載とゝ日本

図まと赤水グ著せる輿地全図あどゝ安藝と出雲と境を接ふる国と為と依ゝ依て神代紀私説ゝ簸川入安藝為埃川と云ひ同藻塩草まと白蘇傳あども流出雲者為簸川流安藝者為可愛之川也と云へり皆是出雲国島上の峯と流きて安藝国ゝ達るれ意ゝして眞の地形を知ざる説あり雲藝二国の堺は備後と石見と を夾みて隔れゼ風土記ゝ境を石見伯耆備後は三国ゝ接る事も有ら載せきど藝州ゝ鄰ゝ依こゝを記せゝ事一ゝ於ゝ殊ゝ再板の輿地全図ゝ雲藝二国は境を改むゝと我グ図せゝ如し通證は説の如き可愛之河を安藝国安藝郡府中ゝ在る埃宮の舊跡とゝまと同国山縣郡戸河内村ゝ在る十方山を島上峯とし十方山接雲石二州甚峻高有石窟相傳太古大蛇居之至今雲霧朦く風雨不時同郡有可愛淵而源出十方山多奇石怪巖疑此乎と云る大ゝ舊史の載安所と反へゼ若其説の如くは埃川簸川二水は源いゝ一山をり出るゝとを得むゝ十方山を以て島上は峯と為し境を出雲石見は二国ゝ接安藝郡府中と謂ふは正西ゝて石見周防は二国ゝ近く出雲ゝ遠きこと數十里あり。もし此山を以て島上は峯と謂ふと況は簸川

れ何の境を流きて斐伊郷に入るやもし此郷に流れざれば川と謂むや可愛淵をもて埃川とはるも亦そ差牙る我知ばし谷重遠説は今訪安藝国不聞有可愛川と云ふれ當れり。それ我友了祝利万呂をいふ者あり。安藝国れ人ふて日本紀ふ心を盡はあと久し諸註れ説ふをりて埃川を其国は求むるふ卒は其蹤を得ぎまと雲藝二国境を接ふる地ありやと求むれども亦得ぎと云へ已我この説を信じて此を藝州ふ求ぬ雲州ふ求ぬて其舊跡を得ぬ已。

埃川とれ安來郷ふ經流ふ。伯者れ大川を

いふ其れ出雲風土記ふ伯大川源出仁多與意宇二郡堺葛野山流經母理楯縫安來三郷入海とある即是ふ已。今云。内山眞龍ゲ此風土記解ふ河源ふ母理郷ふ今も畑村と云あり川下れ安來郷の北りて海ふ入る里人れ白田川ぜいふ風土記抄ふ母理郷井尻川也葛野山井尻中草野折坂而東北大村之堺也と云へ已。○宣昌ゲ説れ島上二水考證として板本りて一卷あり漢文ふ書とるを目安くと今は假字ふ記しぬさて序ふ言れむ前了徴ふ其文

を引るふ筆執る者の誤りて此風土記を引る文ふ伯大川と而ふを伯者大川と書とるを校合ふ時ふ心付ぬて世ふ弘ぬとりしれ篤胤ゲ説ぬ過ぬりけ已者字を刪去べし其源れ仁多郡と能義郡と

れ堺ふ葛野山を已出て上流を伊志尾川ぜいひ北は母理安來郷ぜれ郷を過て伯者国ふ入已舟上米子ふぜの地を經て海ふ入る此を日根川といふ伯者国ふ流ふ故ふ此を伯者れ大川と稱ふ葛野山れ二郡の堺ふ在已て東南は島上峯ぜ麓相近し是を以て伊志尾川れ源れ島上峯ふ遠らざるを知ばしと云ふ已。ふ本書ふは地図をも著して委く論へ已披き見べし。

命天壁立廻坐之爾時來坐此處而詔吾御心者安平成詔

故云安來也。とゐるふ符ひて。甚珍らし。如說ふ。但し彼考證ふ。此文を引ざゐハ見落しゐるゥ。甚惜き事ゆりふ。本第六十八段。鏑川の処ゥも注ふを見るべし。○吾御心。神等ハ更ふ。古く貴人さち。御自の上ふ尊み語を付て宣ふこと。例いと多ゥ。○安平成焉て。安久於陀比邇成奴と訓べし。天壁立極み廻り。新羅国ふ到り坐して。此處ゥ吾居まく欲せばと詔へゐを思ふよ。此時しも。皇国も猶いまゞ能營さゐふは非ゐども。蕃国くゥ荒芝とるふ比ぢては。此を外く勝と。ゥ故ふ。此地ふ來坐して。御心安く平穏ふ思召けるゥや。○故其地云安來也。神等ゥ御言ふ據りて。やゞて其地の名と成れるふ。次くふ甚

多く見えゐ。

爾神速須佐之男命詔曰。韓郷之島者。有金銀。於吾兒所御之国。不有浮寶則未佳也詔而。乃拔髭髯而散之則。即成杉。又拔

胸毛(ムナゲヲ)テ散(チラレタ)マヘバ則(コレナリ)。是(ヒノキニ)成(レリ)檜(ゲ)。尻毛(ハ)成(ナリ)被(マキニ)眉毛(ユゲ)者(ハ)成(ナリ)樟(クスニキ)矣(カクテ)。已(サダメ)而(ソノ)定(ニ)其當用(ツカフ)而(ニ)乃(ナハチ)稱(スナハチコトアゲレタ)出(マ)曰(ハク)。杉(スギト)及(クス)樟(コノ)。此(フタツノ)兩木者(キハ)可(ベレ)爲(ツクル)浮寶(ウキタカラニ)。檜(ヒノキハ)者(ベレ)可(ナス)爲(ミヅ)瑞宮(ミヤ)出(ノキ)材(マキ)。被(ハ)者(ウツ)宇都志(レキ)伎(アヲ)青(ヒト)人(クサノ)草(ハ)出(ヒ)。

可(ベレ)爲(ナス)奥津棄(オクツ)戸(スタ)臥(ヘニフサム)出(ソナヘトノリタ)具(マ)詔(ヒテ)而(ソノ)。夫須(ベキ)噉(クフ)八(ヤ)十(ソ)木(コ)種(ダネモ)。皆(ミナ)播(マキ)生(オフシ)出(タ)矣(ヒキ)。

爾(コニ)。安(ヤス)來(キ)ふ渡(ワタリ)來(キ)まして。御心(ミココロ)平穩(タヒラ)ふ成給ひし時ふ云ふ。

○韓鄕(カラクニ)之嶋(ノシマ)とは。新羅(シラギ)國を宣(ノタ)へ。凡(ヒト)て外國(トツクニ)を。加羅と云事と成れめしは。崇神天皇御世ふ。大加羅國人始て來朝しとは。但し此大加羅國の人を。次の垂仁天皇御世ふ。御暇賜へる時ふ。先御代崇神天皇の大御名を賜ひて。國名を。任那國と改め。今然へは。然れども。加羅國と称て來れる故ふ。其元名を以て。外國に。吾國ふ參來る者ふ。悉く。加羅と云事と成れはしあるべし。記傳渡屯家の下ふ。加羅國と云ハ。

任那の舊名ゐて。崇神天皇の御代ゐ外国の始て参ひし
て。此国ゐり。故西方諸外国ゐれ大名とゐうて。三韓をも漢
国をも。みれ加羅と云れひ。然るゐ此を多ゞ三韓れみゐ
限ゐ法名と心得て。漢国ゐどを然云ゐ。誤ゐひと云は。中
中ゐ非ゐひ。ゐ有て。其證ゐもゐも挙らまゐ。○金銀和名
ひ。猶委くて。垂仁天皇巻ゐ注ふ埃見るべし。○金銀和名
抄ゐ。金爾雅云。黄金謂之璗。其美者謂之鏐。説文云。銑。和名古加
祢。金之最有光澤也。銀爾雅云。白金謂之銀。其美者謂之鏡。
和名之路加祢。ゐてのひ。白金を之路加祢といふゐ準へて。黄金を
伎加祢とあはべきゐ。古加祢ゐてのはて。音れ轉きるゐひ。
書等ゐて。古加祢ゐも。久加祢とも。伎加祢ともあり今は
正紀ゐ依て。伎加祢と訓ゐ。都て加泥の事て。第十一段の
傳ゐ委く注へるゐ見はべし。
ちて有金銀ゐ宣ゐはは。能見置とゐひて。後ゐ其ゐ取ひ

ゐ遣ひ給て むゐ。御心中ゐ定ゐ給へは御語ゐり。○吾兒
とて。泛く世くれ天皇命を詔ひ。所御之国とて。此御国を
詔へひ。此時いまゞ皇美麻命ゐ。豐葦原中国を知看せと
ふ御言依しのれき間ゐきど。後ゐ天降坐して。治ゐ給ふ
ぢき幽ゐ紀由緒れ既く定れる故て。豫ゐかく詔ゐるれひ。
第三十五段ゐ云へる。忍穂耳命ゐ。天照大御神て。御父の
如く。須佐之男命て。御母の如く御まゝ由とし。第六十四
段ゐ。大御神の三女神ゐ。為皇美麻命所祭と詔へる処ゐ
注せる説どもを合せ考へて。御子ゐ宣ひ。美麻命の御国
を治看ゝ。幽き由ての事を辨ふぢし。○浮寶は。纂疏ゐ。指船也とてのはゞ如
し。不有浮寶則未佳也とて。谷川氏云。韓国有金銀則宜常
往來以資国用故不可無船枝之意也。此仲哀天皇紀神教

之起本而所謂求敗寶国者是也と云るは宗然る説なり。然れども彼御世の神託言ふ天照大御神の御心となり。此れ其荒御魂れ大御神と須佐之男命と二柱れ御魂より。て互ひ往通ひ坐に故ふ須佐之男命の此ふ見行し定め置給へる事をし大御神の御敕し坐て其御定めれまふ。まよ韓を言向し免給へふあり。れを次段韓神といふ御名れ下ふ注ふ説まと仲哀天皇巻ふ注ふ事ぞもを合せ考ふ抑河海を渡ふ船を用ひ給ふる事れ正しく見えべし。多ふれ神功皇后の御巻ふまぞも宗れ早く大国主神の御世頃ふ外国〻れ金銀を始め其餘れ寶物をも御心れまよ〻取用ひ給へゆと思ふ由あり。然るふ其事の見えぢふれ傳の洩とるふ此事委くれ弘仁歴運記考れ末ふ考へ注せふを見て知ふ。神武天皇御代ふ舟師と云こと見え崇神天

皇御世ふ意富加羅国より貢物奉れる。まと垂仁天皇御世ふ多遲麻毛理が常世国ふ渡をふふを初め。れやく船を用ひとる。○鬚髯和名抄ふ。説文云髭口上鬚也。和名加美都比介。鬚髯頤下毛也。和名之毛都比介。を有きと。此れ字ふを用て訓を別と用ひと見も。古言ふれ。只ふ比宜ぞ云々む。故二字を連ねて。美比宜と訓ぢし。○即れ其れ義ふ見るぢし。○杉れ和名抄ふ杉唐韻云。似松生江南可以爲船之枝也。和名須岐見日本紀私記今案俗用榲字非也。と有れぞ。師説ふ古書どもふ。須疑ふ榲字を用ひ。或れ椙ぞも多く作用。顯宗天皇紀ふ。振之神榲榲此云須擬と見え。出雲風土記ふ杉字或作椙と見え。万葉ふどふも。杉榲とふ用ひとゆ。和名抄ふ用

榲字非也とあきぞ。漢籍ふも集韻ふ。榲音溫。杉也と云へ
ど。おれ宋代の書かれど。かくて榲を榲と作くは常のこ
も古き據ぞ有ゝむ。
ぞ外り。榲を榲を誤きるけて須岐は進木ふ。此木かゐ
ものふる法し。
はら牙蔓らば。只ふ上牙進み上る木外きぞ外り。直木とはるむ
ところし。直をきぐと云ふと古ふ非ば。万葉ふどふ桙榲。まと榲桙ふと詠る
も。進み上れ法故ふ云牙る事ぞ聞え為ど。漢籍ふも杉出倭国者尤佳と
云牙り。○胸を和名抄ふ。唐韻云。胸臆也和名無称。とあど。下ふ語
を連ぬる故ふ。年那とは云ふど。○檜を和名抄ふ。爾雅云。
栢葉松身曰檜和名比乃木。ぞあのり。まと和名非ぞもあり。字鏡ふ檜比とあど。此木
れ枯と法を更ふど。山ふ樹と法も。大風ふ吹揉法〳〵時を。

とく火を出きぞ故ふ。火木と云法ふる法し。○尻を和名抄
ふ。唐韻云尻和名之利。臀也。俗云井佐良比を。坐處也とあど。井佐良比を居去を延と
る語ふる法し。○被を和名抄ふ。玉篇云。被木名。作柱埋之能不腐
者也。日本紀私記云末岐。今案又杉一名也。ぞあど。今按ふ。杉の一名と云牙
法を如何あらむ。さて此名義を思ふふ。檜を瑞宮の枝と為べし。ぞ詔
牙る如く。宮枝の上と法木と定ど。元をゆ良木ふ法故ふ。下
ふ引く万葉ふどふも。眞木ぞ云牙ど。此を眞魚。眞鳥。眞土。
眞金。眞水。眞草外ぞ云ふ類の名ふて。稱美と為る言外法を。
被を此ふる木の中ふ。卑し外木ふきぞ。眞木と稱法き由
ふし。されど神武天皇紀ふも。被此云磨紀と有きば。訓の誤ふ

むにのらじ。此を末岐と云む。別義あはべし。本草ふ。披む榧也。○とも石のり。いかり。○眉は日本紀ふ。麻與ゑ訓とれど。和名抄ふ。說文云目上毛也。和名萬由。ゑ石はよ從ふぢし。○樟む和名抄よ。唐韻云。楠木名也。字亦作枏。和名本草。久須乃岐。橡樟。日本紀私記。訓同上。生而七年始知矣と石ゐ。橡樟の二字を連ね。一字ぢ放ちてもクスノキと訓む字ゐ。此む古書ふ石樟ゑも云ひて。歳古知む生ぁぐらも石ふ化る異しき木ゐれむ。奇木の義ふはぢし。神名式。遠江。固慕原。郡よ。大楠。神社あり。後風土記ふも見えと。此社の委き事む。仁德天皇。卷六十二年れ処よ云べし。○まと伊豫。国越智。郡ふ。樟本。神社と云もあり。三代実錄ふむ。樟を楠と石ゐ。○己而む。加久氐と訓ぢし。○當用む。都加布美知ゑ訓ぢし。上れ杖どもを用ふる法を定給ふれゐ。○稱之

曰は。許登阿宜斯多麻波久と訓べし。○杉と樟とは。水ふ浮びて輕くゐ。ゐ恒ふ水よ浸ゐて朽ざはゐ木ゐ。故船杖ゑむ定給ひれむ。古く石楠船といふ名れ聞えて。今も船むゐれら。此兩木をもて造る事ゑ定まゐぬるは。此大神の御定ゑの。ゑく通れる也れゐ。漢籍ふも杉む船よ為るべしと云ひ。江東と云処ふてむ。船よ多く樟。木を用ふと云事もゐり。神れ教れ。彼国ふも存れはあり。○瑞宮む。美都美夜ゑ。本ふ訓るよ從ふぢし。祝詞ふ瑞能御舍と有も同じ。縣居大人說ふみ於ちふ言は。万の物れ。稚く安そそろれはを云ふ。神武天皇紀ふみ於くし久米の子ゑ。万葉ふ。若枝の事をみ至枝さしといひ。顯宗天皇紀れ室賀の

御詞ゐ。稚室とも宣給ひ。常人のみ於〳〵しと云も是ゐ
ゐ。あ〳〵よみ於れみあらう。みゐ穂れ国を云ふも。共ゐ同
じ意のほ免言と知ばし。然るゐ後ゐ。瑞の字を書て。本の意より遠し。記も此文も。から文ゐ
依て。か〳〵るゐを多し。此の言を知てれち見む。違へる事明らゐ。ゐらむを云れとゐゞ如し。ゐ
美都てふ語の義も。既より第五十段れ傳ゐ云へゆき。今ゐ至るゐて。伊勢れ大神宮。
天皇命の大宮ゐど。決免て異杖を用ざゐた。此御定ゐ依
ゐ事ゐゐ。然れむ。凡て誰神の宮くも。此ゐ慣ひて。此木を
もて作るばき事ゐるゐ。今も槻木。けやきゐど。
其餘の木をも用ひて。種くれ物れ形ゐど彫ゐ。赤土青土
れどもて塗ゐ汚し。営る事と成始るも。佛宇の造様を学
ひとるゐて。甚も見苦ゐき態ゐりゐし。○宇都志伎青人草とも。愛し死人類
といふ義れゐ事。上ゐ委く註へゐ。第二十段れ傳見るべし。皇産霊大

神。ゐと御父母れ大神さちれ。愛しみ給ふ人類ゐる故ゐ。
其御心を受てかく宣ふれゐ。但し此も。解除の験ゐ依て。起め給ふる御心ゐ有ぞ
き。○奥津棄戸は。於久都須多邊と訓ばし。本ゐ於伎云くと訓とり。何ゐ
ても宜し。さて神代紀ゐは戸と作れぞ。舊事紀ゐ尸と作ゐ。此も
唐書ゐ。断棺棄尸とゐる文ゐ因ら上古ゐ死人を葬る事
ましゐやと思ゆまむ。此ゐ従ゐ於。
残。奥津須多邊ゐ臥安ぞ云けむ。奥とも地下残いふ。津
も助辭ゐゆ。棄尸れ義は詳ゐらば。棄肌の義と云る説も有れど。叶ずりぞも思
えば。もし戸ぞ作るゐ據まむ。棄尸とも棺を云ふう。其も死
人を納まて棄る戸といふ義ゐや。墓を於久都伎と云は。奥津城の義ゐれむ。棺
をまと棄戸とも云ばきゐり。れゐ奥津城
れ事も。垂仁天皇巻ゐ。委く注を見べし。○臥之具とは。

私記ふ。死者臥化故云と云あり。或説ふ。是上古臥棺之明證也と云へるは。冥然る説あり。谷川氏云。上古坐棺未見其治之以朱。其尸南首。伸手脚。而臥。或有藏鏡劔器物者。但今世士庶多用坐棺。蓋取其便也と云へり。此も然る説あり。

ちて漢籍爾雅ふ。披一名粘也を有り。説文ふ。粘似松可以爲船及棺。杜作柱埋之不腐と云へり。世ふ常に用ひて水桶ふ作るふ。能く水ふ耐ふる木なり。似松とあれど。松ふも似て葉大きあり。檜ふ能似て有まぜ。彼をり卑しき木故ふ。檜木ふも明日成らむと云義ありとて。アスナラウと俗りて云ひ。まさサワラをも云なり。水桶も多く此木をもて造る故ふ。乃多桶を直ふサワラとも云あり。まさ此木を宮杜に更あり。凡人の家作ふも用ふ事を忌む。奥津棄尸の木と定給へ説謂ふをることあり。

○須噉八十木種とは。世人に忘ぢて。冥をも葉をも噉ふぢき。種くに木種をもを播生し給ひゆとあり。梨栗柹の類に衆菓を謂ふと云ひ説にいを狹し。

○門人岩崎長世。片桐春一。間秀矩。樋口光信ら云ふ。此の十四の巻を板ふうして。紙ふ寫して。世ふ弘くひろむ。

依人に。信濃國伊那郡。飯田の市に事とあり人。野原正基。毛賀に里長。木下光忠等ふあり。

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan